

平成 2 6 年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～ 千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

平成26年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

小学校第6学年及び中学校第3学年

(3) 調査の内容

教科に関する調査(国語、算数・数学)

生活習慣や学習環境等に関する児童生徒質問紙調査

学校の教育活動や教育課程に関する学校質問紙調査

(4) 調査実施日

平成26年 4月22日(火)

(5) 調査実施学校数及び児童生徒数

小学校16校 941名 中学校 8校 815名 (北進小中学校を除く市内全校)

2. 結果の概要

■ 小学校

国語A(主に基礎的な内容に関する問題)、国語B(主に活用に関する問題)、算数A(主に基礎的な内容に関する問題)、算数B(主に活用に関する問題)の4種類の調査を行った。

全国との差は確実に縮まっており、B問題(主に活用に関する問題)は全国と比較するとやや低い状況にあるが、国語・算数ともにA問題の正答率はほぼ同様であり、特に国語Aは全国を上回った。正答した問題数では1問以内の差であるものの、全国を目標とするとまだ改善を必要とする状況である。

■ 中学校

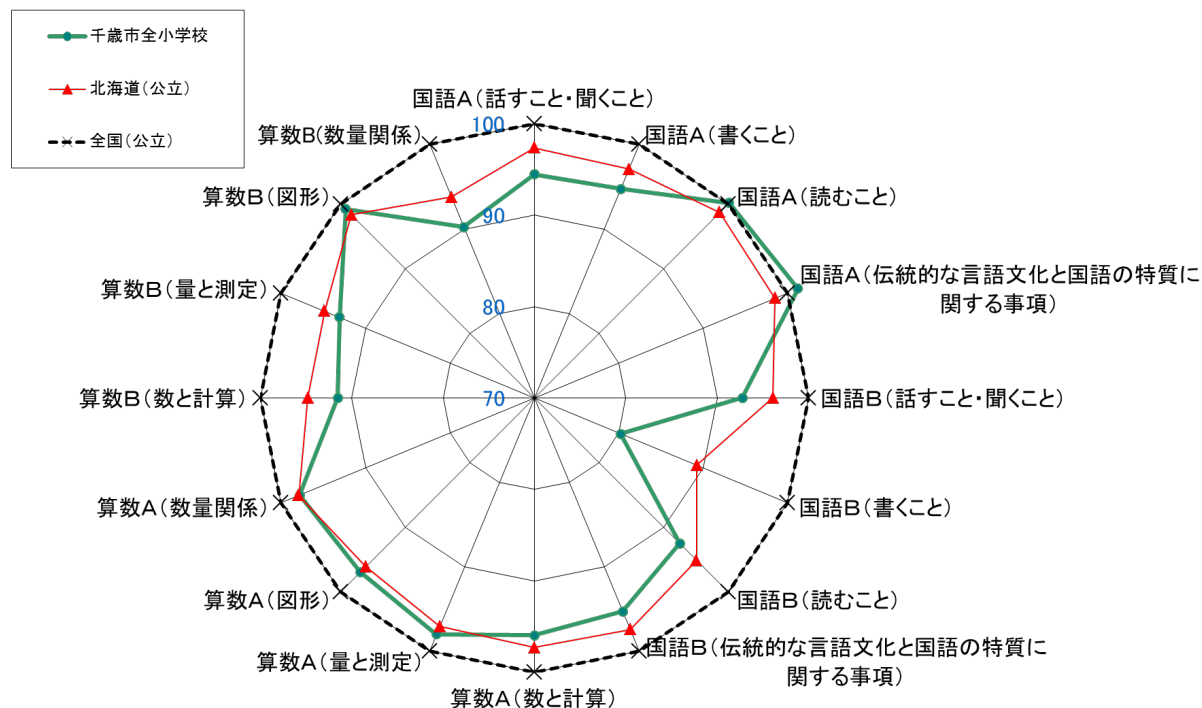
国語A(主に基礎的な内容に関する問題)、国語B(主に活用に関する問題)、数学A(主に基礎的な内容に関する問題)、数学B(主に活用に関する問題)の4種類の調査を行った。

各教科で全国と同様あるいはほぼ同様である。特に、国語Aは、小学校と同じように全国を上回った。また、国語・数学ともにB問題(主に活用に関する問題)は全国との差を1ポイント未満とした。しかし、数学Aについては全国との差が依然縮められていないことから、今後も基礎・基本的な力を確実に身に付けていく必要がある。

3. 学力調査の結果

小学校教科全体

全国平均を100（一番外側の円）とした場合の全道と千歳市の状況を表したグラフ（以下同様）



小学校教科全体	平均正答率	
	平成26年度	平成25年度
千 歳 市	63.5%	57.6%
全 道	63.9%	58.9%
全 国	66.2%	61.9%
全道との比較	同様	ほぼ同様（下位）
全国との比較	ほぼ同様（下位）	やや低い

（北海道教育委員会の分類方法による9段階～以下同様）

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下 - 3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下 - 5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下 - 7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

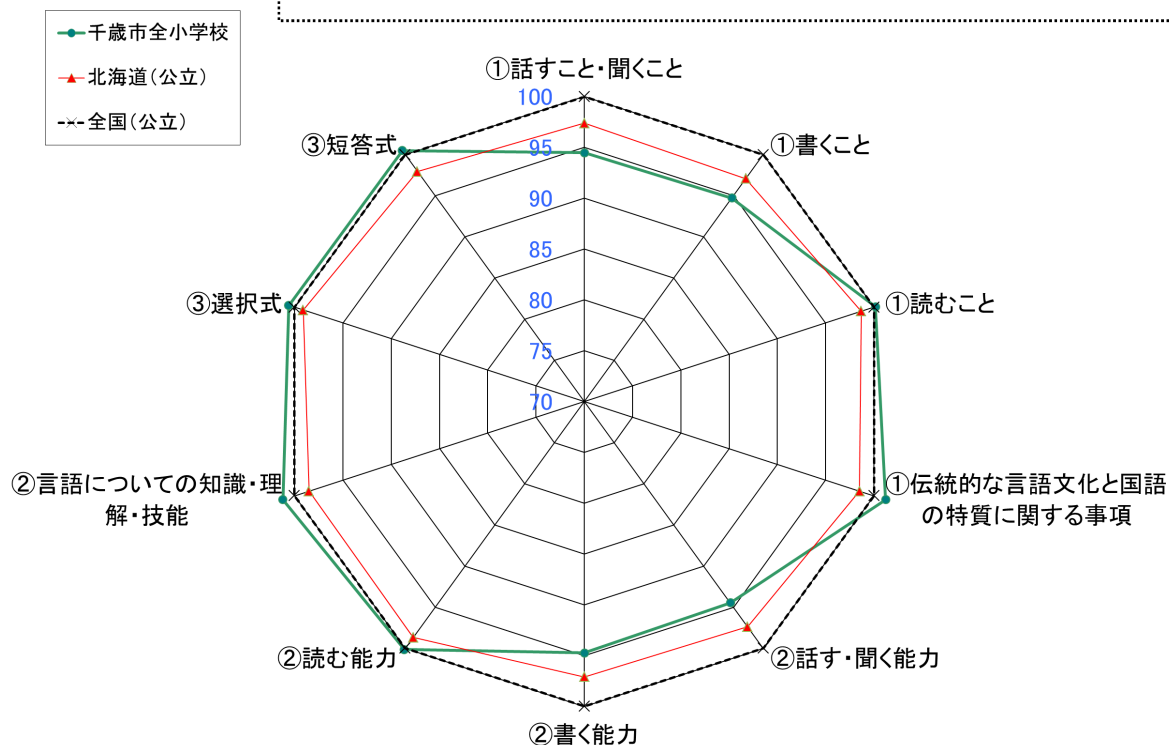
<千歳市の状況と課題>

小学校教科全体では、昨年度に比較し、向上がみられる。全国と比較すると、その差は - 4.3 ポイントから - 2.7 ポイントとなり縮小された。また、昨年度は国語A B , 算数A B とともに全国を上回ることができなかったが、今年度は、国語Aについて 0.5 ポイント全国を上回った。全体としてはこれまでの取組の成果が得られたものととらえることができる。しかし、算数Aについては期待された結果とはならず、一層の授業改善を目指す必要がある。国語B・算数Bについても引き続き課題として残ったことから、指導のあり方について工夫を図る必要がある。

小学校国語 A

【レーダーチャートの各項目について】

「 」は学習指導要領の項目 「 」は評価の観点 「 」は問題形式

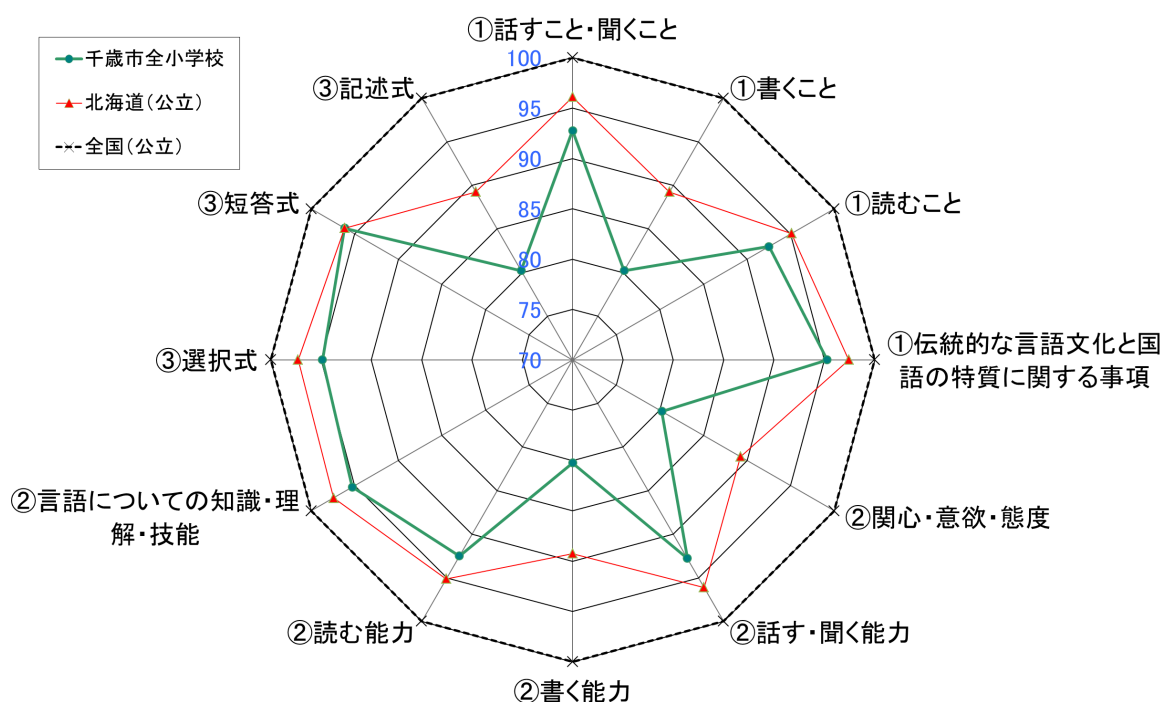


国語 A (主として「知識」に関する問題)		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	11.0 問/ 15 問	10.7 問/ 18 問
	全 道	10.8 問/ 15 問	10.9 問/ 18 問
	全 国	10.9 問/ 15 問	11.3 問/ 18 問
平均正答率	千 歳 市	73.4%	59.2%
	全 道	71.8%	60.4%
	全 国	72.9%	62.7%
全道との比較		ほぼ同様 (上位)	ほぼ同様 (下位)
全国との比較		同様	やや低い

< 千歳市の状況と課題 >

これまでは、毎年全国を下回っていた（昨年度 - 3.5 ポイント、一昨年度 - 4.7 ポイント）が、今年度は 0.5 ポイントながら上回った。昨年度、4 領域中 3 領域で全国を下回っていたが、今年度は 2 領域（「読むこと」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」）に関して全国を上回った。特に漢字の読み書きでは、6 問中 5 問が全国を上回っている。これは、学校質問紙の設問（漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行いましたか）に対し、「よく行った」と回答した学校が全国 51.0%、千歳市 62.5%（昨年度は 37.5%）と全国や昨年度との比較において上回っており、積極的な指導が行われたことを示している。各学校では、漢字検定や放課後・長期休業を利用した補的な学習サポートを行うなど、繰り返し指導がなされているが、今後も確実に継続することが必要である。これまでも課題となっていた「書くこと」の領域について学校質問紙の設問（書く習慣を身に付ける授業の実施）に対し、「よく行った」と回答した学校は全国 29.2%、千歳市 43.8%（昨年度は 18.8%）と積極的な取組がなされており、今後の成果が期待できる。

小学校国語 B

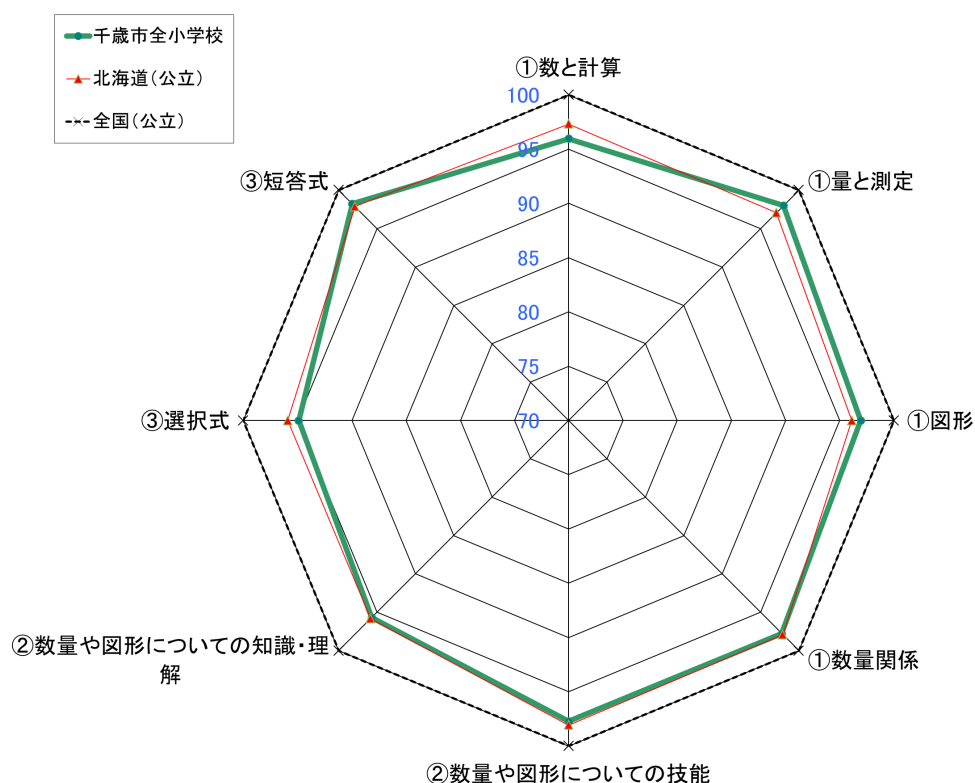


国語 B (主として「活用」に関する問題)		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	5.1 問/ 10 問	4.4 問/ 10 問
	全 道	5.3 問/ 10 問	4.6 問/ 10 問
	全 国	5.5 問/ 10 問	4.9 問/ 10 問
平均正答率	千 歳 市	51.4%	43.8%
	全 道	52.9%	46.4%
	全 国	55.5%	49.4%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)
全国との比較		やや低い	低い

< 千歳市の状況と課題 >

全国を上回ることができなかったが、昨年度 - 5.6 ポイント、今年度 - 4.1 ポイントと差を縮めることができた。これまで課題となっていた無解答率であるが、昨年度と比較し大幅に改善されている。昨年度の無解答率は平均 16.9% (全国 13.6%) であったが、今年度は平均 11.5% (全国 9.2%) と全国との比較においても改善されている。各学校において、長文の概要を粘り強く読み取る指導がなされたことによる。しかし、「書くこと」の領域についての平均正答率は、昨年度 38.5% (全国 43.8%)、今年度 27.6% (全国 34.4%) と全国との差を縮められていない。児童質問紙の設問(今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありました。どのように解答しましたか)について、「最後まで解答を書こうと努力した」と答えた児童は 68.4% (全国 76.1%)、「途中であきらめたものがあった」と答えた児童は 28.1% (全国 21.3%) と、解答を断念した率が高い。昨年度から課題となっている「書く能力」の向上を目指し、学習指導要領の書くことの指導事項に示された「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書く」を踏まえ、「書くこと」と「読むこと」との関連を図りながら、計画的に指導することが求められる。また、全ての教科において、パンフレットやガイドブック、説明書など様々な形式の文章の読み取りや作成を行うなど言語活動の充実を図ることが必要である。

小学校算数 A

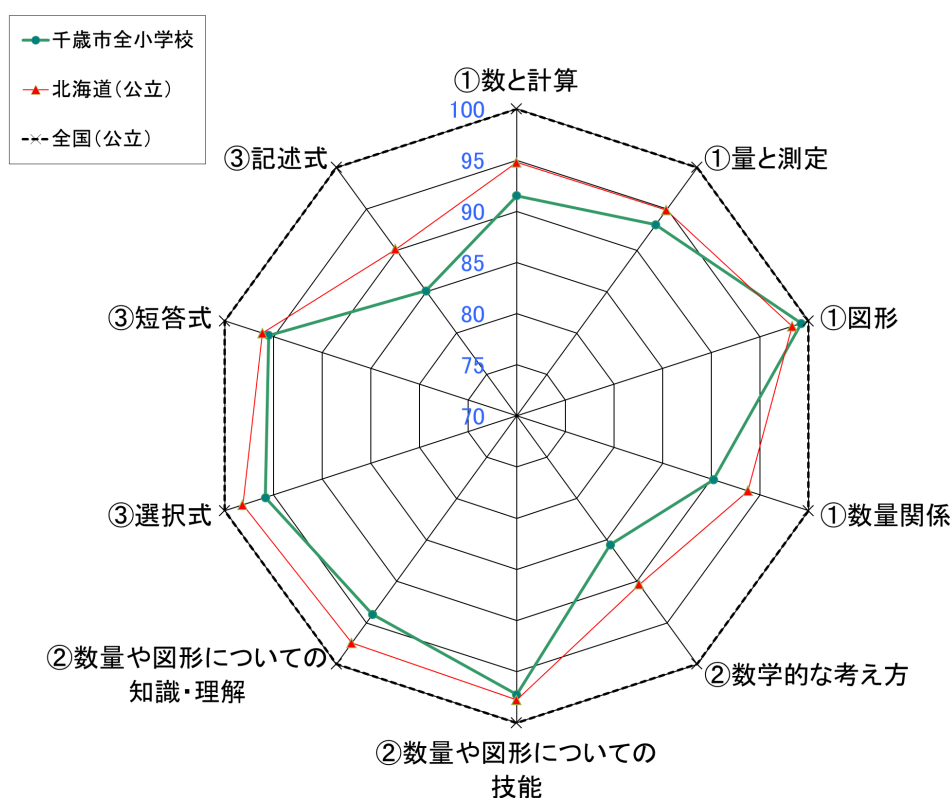


算数 A (主として「知識」に関する問題)		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	12.9 問/ 17 問	14.3 問/ 19 問
	全 道	12.9 問/ 17 問	14.2 問/ 19 問
	全 国	13.3 問/ 17 問	14.7 問/ 19 問
平均正答率	千 歳 市	75.7%	75.0%
	全 道	75.8%	74.9%
	全 国	78.1%	77.2%
全道との比較		同様	同様
全国との比較		ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)

< 千歳市の状況と課題 >

昨年度、「図形」領域に関しては全国と同様の正答率を得、全般的な改善の糸口となると考えたが、今年度、全ての領域で全国には到達することができなかった。「図形」領域について、正答率の高かった問題をみると、昨年度は基本的な作図に関するもの、今年度は円の円周の長さを求める公式に関するものと、いずれも知識としての習得を問う問題であった。一方、正答率の低い問題は、昨年度と同様に、見取り図と展開図の関係の理解を問う問題であった。今後、図形に関する基本的な指導の充実を一層図る必要がある。これまで、指導に力を入れてきた「数と計算」について期待された成果が得られていない。特に「 $9 - 0.8$ 」の計算は全国より 5.8 ポイントも低く、筆算における位取りの意味や概算の理解が深まっていない。また、毎年、正答率の低い、「基準量」と「割合」の関係についての問題は、数直線で関係を表現するなどの学習活動の積み重ねが不十分なことを示している。これらは、低学年から確実に習得しなければならない課題であり、全校一致して授業改善の方針を確立し、徹底することが必要である。

小学校算数 B

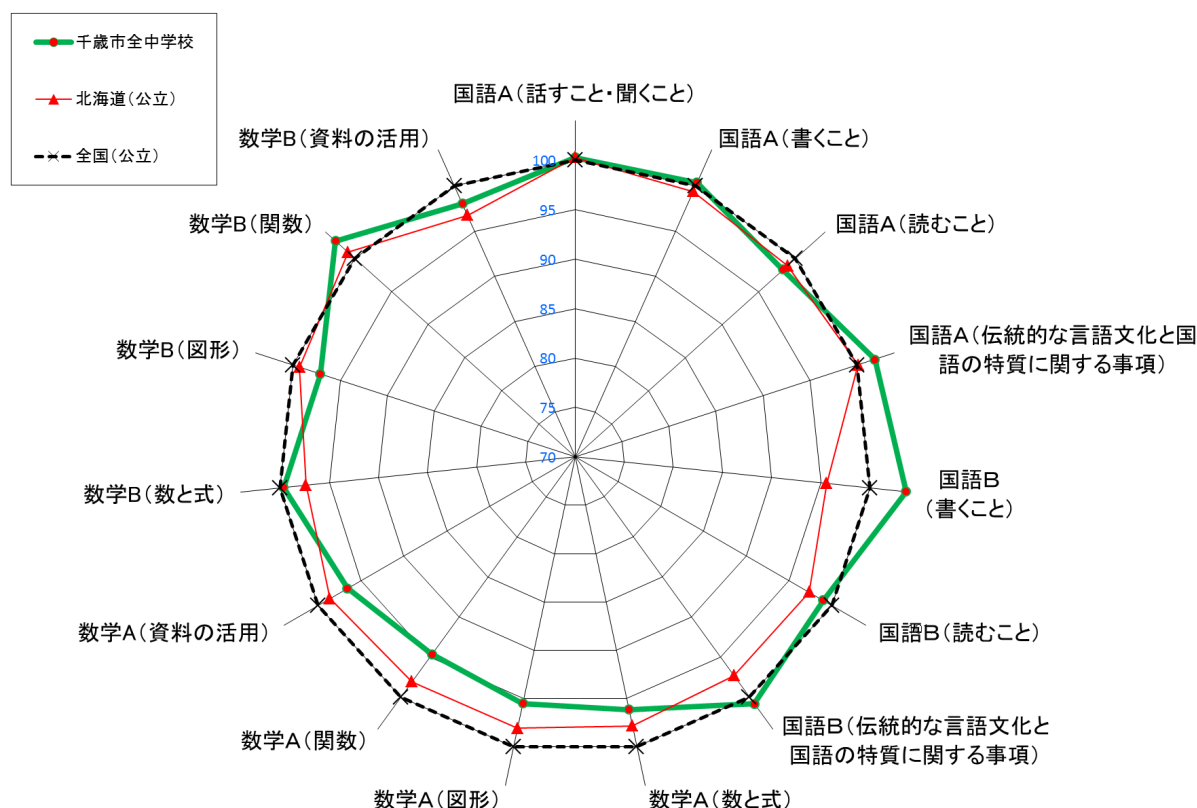


算数 B（主として「活用」に関する問題）		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	7.0 問 / 13 問	6.8 問 / 13 問
	全 道	7.2 問 / 13 問	7.0 問 / 13 問
	全 国	7.6 問 / 13 問	7.6 問 / 13 問
平均正答率	千 歳 市	53.6%	52.4%
	全 道	55.2%	54.0%
	全 国	58.2%	58.4%
全道との比較		ほぼ同様（下位）	ほぼ同様（下位）
全国との比較		やや低い	低い

< 千歳市の状況と課題 >

昨年度と比較し、全国にわずかながら近づいているが、今年度も全ての領域で全国を下回っている。算数 B 問題においては、「数学的な考え方」が中心となり、「物事を数・量・図形などに着目して観察し適確に捉えること」「与えられた情報を分類整理したり必要なものを適切に選択したりすること」等の力が必要となる。時間や物の配分、リズムの重なりなどに関する問題は、それぞれの関係を考察することによって解答できる問題であるが、正答率はかなり低い。「文章やグラフなどの資料」で示された場面の状況を「数学的な考え方」でとらえる能力が求められる。今後、算数科において日常事象との関連や日常の活動における数学的なとらえ方の指導を工夫していく必要がある。また、計算法則の理解を問う問題では全国と比較し 8.3 ポイント低く、数式を確実に処理する基礎的・基本的な能力を身に付けることが求められる。これらのことから、解決のプロセスの説明を重視した授業の展開を図るとともに、自分の考えを数式や図、言葉を用いてノートに記すなどの学習を確実にこなうことが必要である。

中学校教科全体



中学校教科全体	平均正答率	
	平成26年度	平成25年度
千歳市	63.8%	59.8%
全道	63.7%	60.9%
全国	64.4%	62.3%
全道との比較	同様	ほぼ同様(下位)
全国との比較	同様	ほぼ同様(下位)

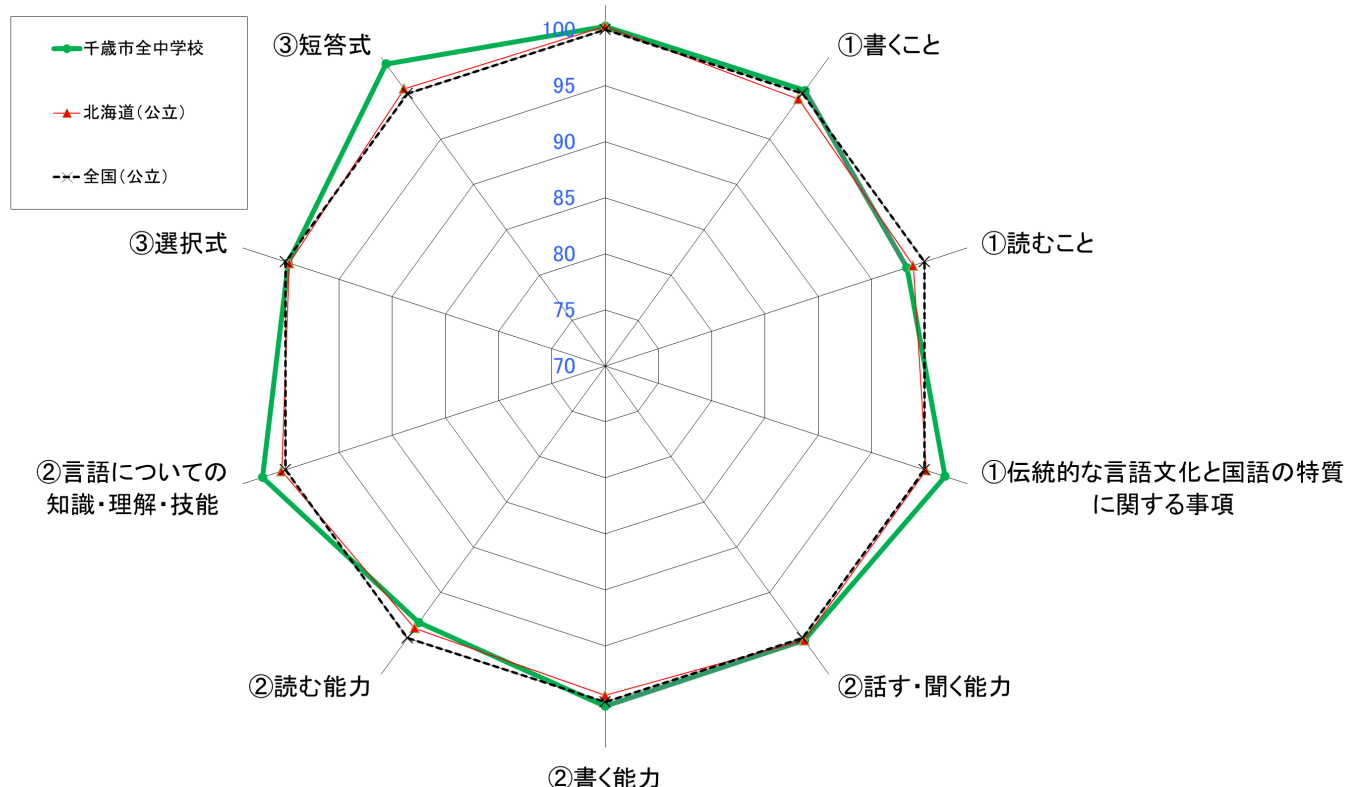
(北海道教育委員会の分類方法による9段階～以下同様)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下 -3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下 -5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下 -7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

<千歳市の状況>

中学校教科全体として、今年度全国を0.6ポイント下回ったが、昨年度2.5ポイントの差があったことと比較すると、大きな向上である。国語A(主として「知識」に関する問題)では、全国を0.8ポイント上回り、特に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については全国を1.7ポイント上回っている。漢字の読み書きや語句の意味の指導などについて取組の成果が表れている。国語B(主として「活用」に関する問題)についても、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域で全国を上回っている。数学Bについても全国と0.1ポイント差としている。国語A・B、数学Bが全国と同様の成績であることにに対し、数学Aは昨年度から3ポイント程度の差を縮められていない。これらのことから、数学について基礎・基本的な力を確実に身に付けていくことが今後の課題である。

中学校国語 A

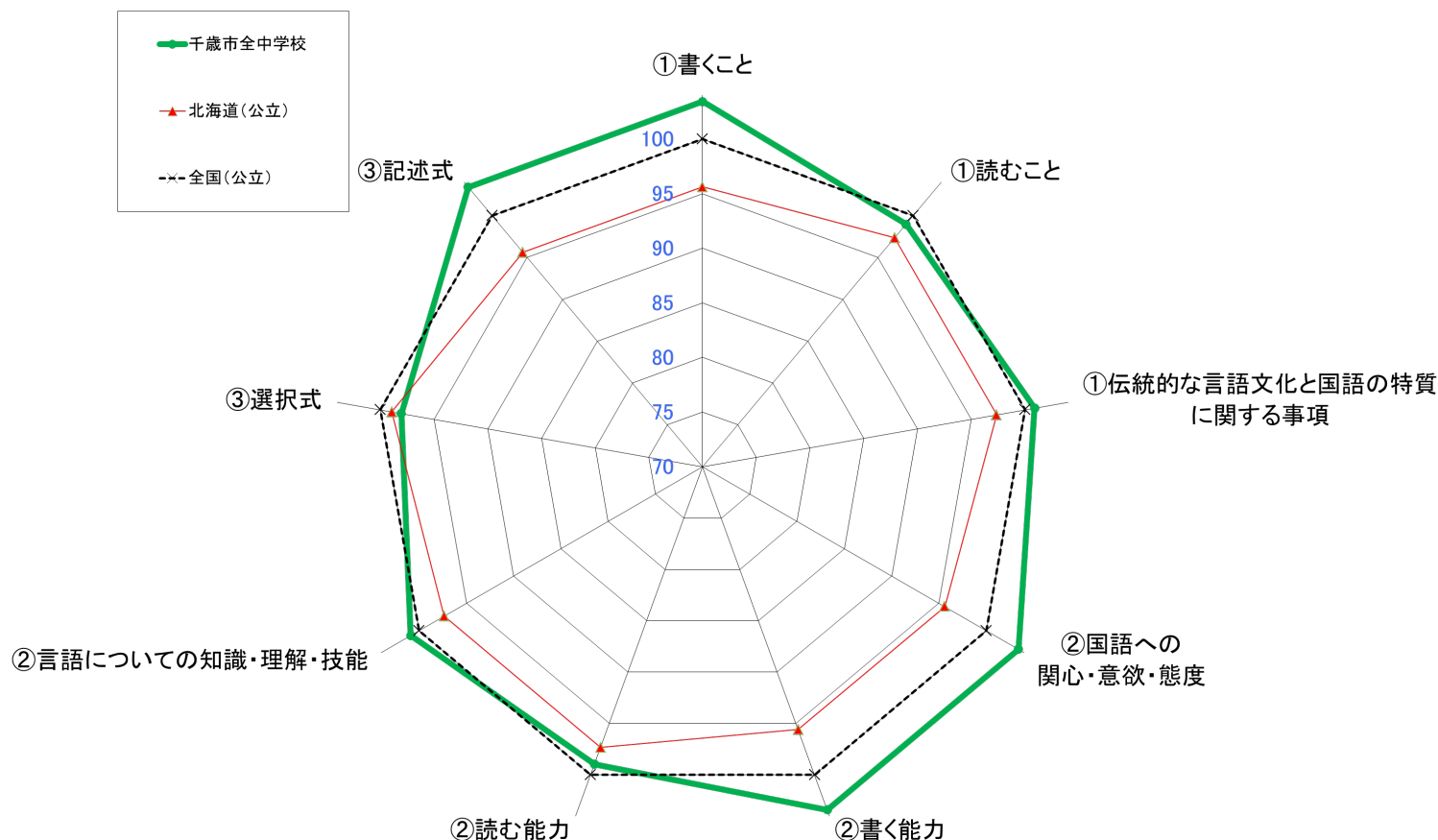


国語 A（主として「知識」に関する問題）		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	25.7 問/ 32 問	24.3 問/ 32 問
	全 道	25.4 問/ 32 問	24.3 問/ 32 問
	全 国	25.4 問/ 32 問	24.4 問/ 32 問
平均正答率	千 歳 市	80.2%	75.8%
	全 道	79.4%	76.0%
	全 国	79.4%	76.4%
全道との比較		同様	同様
全国との比較		同様	同様

< 千歳市の状況と課題 >

これまでわずかに全国に及ばなかったが、今年度は 0.8 ポイントながら上回る成績をあげた。これまで課題であった「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域における漢字の「読み」と「書き」について、今回出題された 6 問すべてが全国を上回るなど、大きな改善がみられた。「アユの稚魚を放流する」の読みでは全国を 9.0 ポイント上回っていたが、地域的にふれることの多い言語に強みを発揮した。このことから、語句の習得については、国語の授業のみならず、あらゆる機会を通してなされることが有効であることを示している。歴史的仮名遣いや語句の意味を問う設問についても全国を上回っており、国語に関する知識がしっかりと定着している。しかし、文章の読み取りを問う問題の正答率が低い。学習指導要領において、「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」が示されているが、「文章の大体を理解すること」と「叙述に即して詳しく読み取ること」を読み取りの方法として確実に身に付けることが必要である。また、日常生活においても多様な分野の文章に接し、文章の大体をつかみとる経験を多く重ねることが求められる。そのため学校図書館などの活用を促進する必要がある。

中学校国語 B



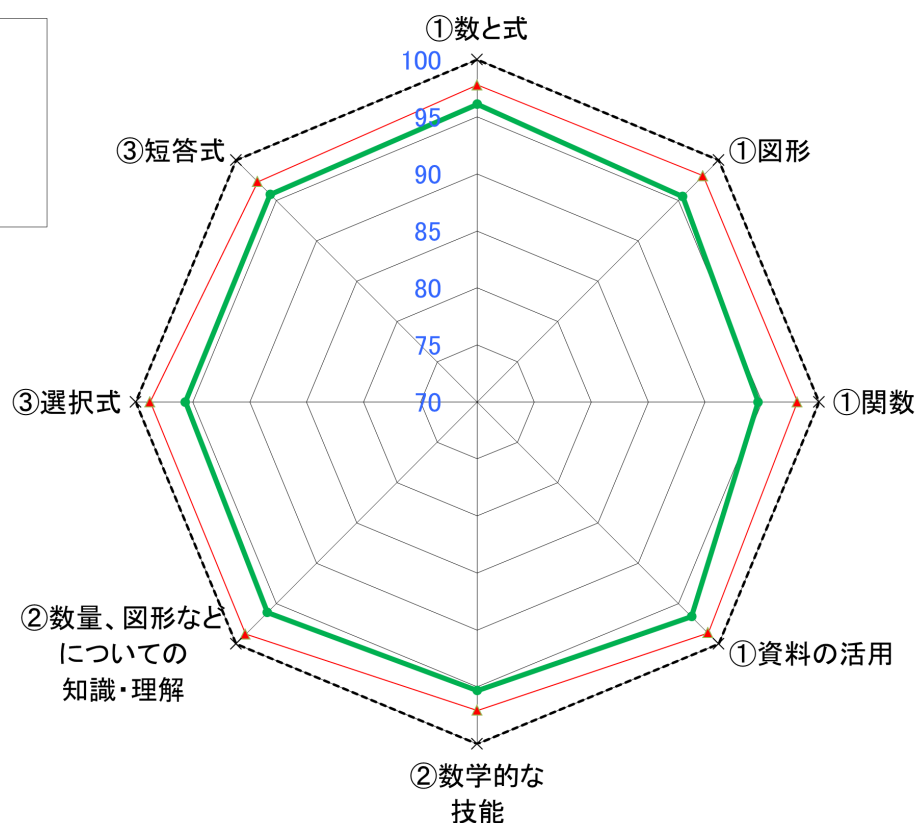
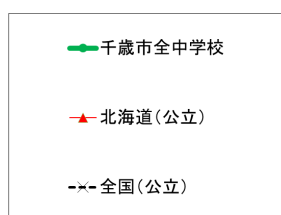
国語 B (主として「活用」に関する問題)		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	4.6 問/ 9 問	5.9 問/ 9 問
	全 道	4.5 問/ 9 問	6.0 問/ 9 問
	全 国	4.6 問/ 9 問	6.1 問/ 9 問
平均正答率	千 歳 市	50.6%	65.0%
	全 道	49.9%	66.2%
	全 国	51.0%	67.4%
全道との比較		同様	ほぼ同様 (下位)
全国との比較		同様	ほぼ同様 (下位)

< 千歳市の状況と課題 >

平均正答率は全国との比較において、今年度は - 0.4 ポイントと昨年の - 2.4 ポイントから大きく向上し、全国と同様の成績となった。領域別では「書くこと」(資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確になるように書く・ものの見方や考え方について、根拠を明確にして自分の考えを書く等)が 1.4 ポイント全国を上回っている。国語 A が全国を上回る成績であることも合わせ、本市の生徒の国語の力は向上の傾向にある。

国語 A の分析においても課題としたが、さまざまな文章を的確に読み取る能力の向上が必要である。学習指導要領では「読書と情報活用」の指導事項を設け、様々な本や資料を読むことを重視している。また、全ての教科において、パンフレットやガイドブック、説明書など様々な形式の文章を読み、その特徴を書き表わすなどの言語活動の充実を図る取組を継続する必要がある。

中学校数学 A

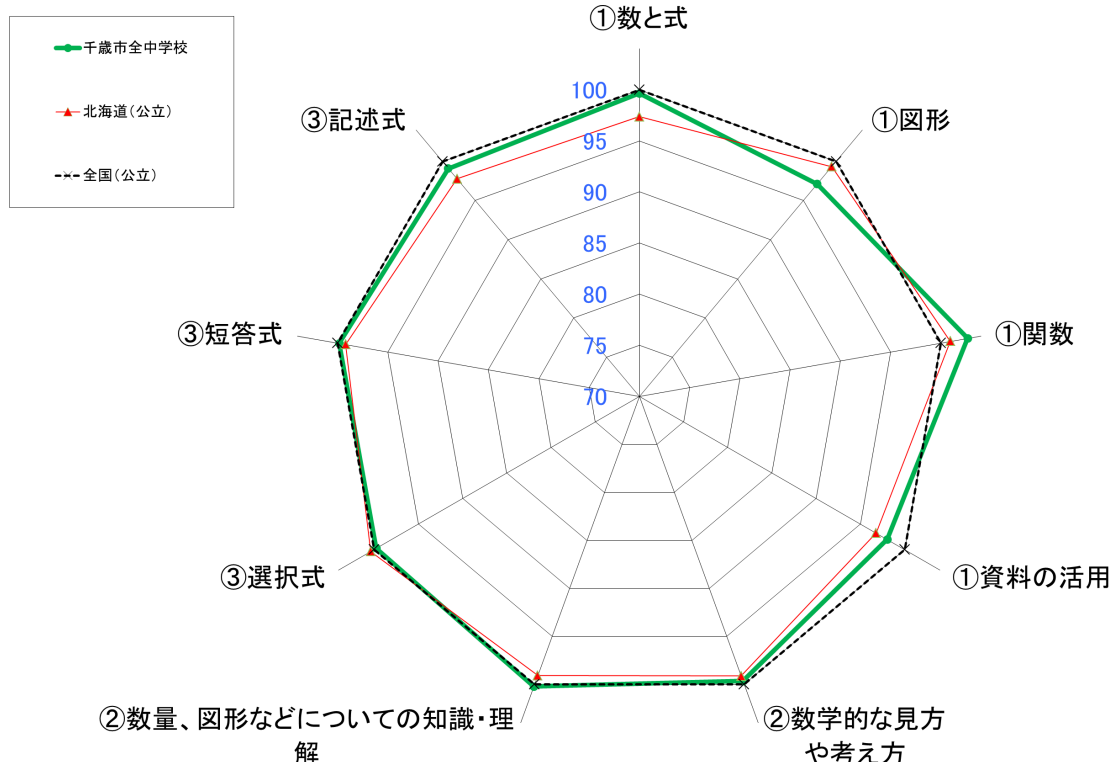


数学 A (主として「知識」に関する問題)		平成 2 6 年度	平成 2 5 年度
平均正答数	千 歳 市	23.2 問/ 36 問	21.9 問/ 36 問
	全 道	23.8 問/ 36 問	22.4 問/ 36 問
	全 国	24.3 問/ 36 問	22.9 問/ 36 問
平均正答率	千 歳 市	64.5%	60.8%
	全 道	66.0%	62.3%
	全 国	67.4%	63.7%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)
全国との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)

< 千歳市の状況と課題 >

今年度も全ての領域で全国を下回っている。平均正答率の推移は、今年度 - 2.9 ポイント、昨年度 - 2.9 ポイント、一昨年度 - 2.2 ポイントと差が縮まらない。「数と式」の領域、特に、() を含む正・負の数の計算、加法・減法の計算、数量の関係や法則などを文字式で表すことは、昨年度も課題となった内容であるが、今年度も、 $2 \times (-5^2)$ を計算する問題、 -7 の絶対値を書く問題、数量の大小関係を不等式に表す問題では、全国よりもそれぞれ 8.7 ポイント、6.0 ポイント、8.0 ポイント低い。また、図形(底面が合同で高さが等しい円柱と円錐の体積の関係をみる問題) や関数 ($x = 2$ 、 $y = 6$ のときの比例の関係を式に表わす問題) は、全国よりもそれぞれ 11.7 ポイント、9.1 ポイント下回る。これらは各領域の基礎的・基本的な問題であるが、理解が不十分である。このことから、教育課程や指導過程の見直しを進める等、一層の授業改善を目指す必要がある。また、当面、誤答が多くみられた問題の復習を進めるなどして、確実な定着を目指す必要がある。

中学校数学B



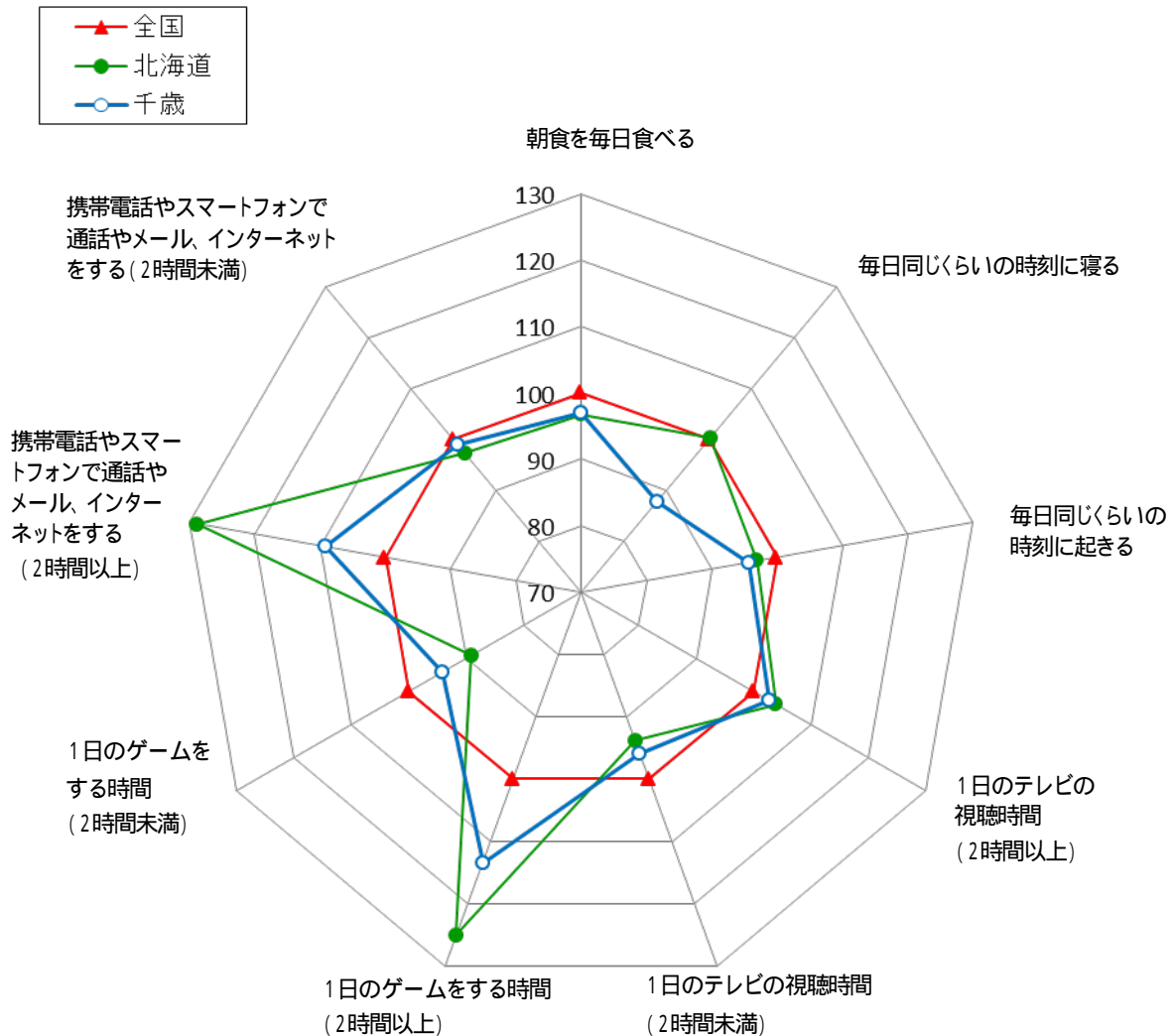
数学B（主として「活用」に関する問題）		平成26年度	平成25年度
平均正答数	千歳市	9.0 問/ 15 問	6.0 問/ 16 問
	全道	8.9 問/ 15 問	6.3 問/ 16 問
	全国	9.0 問/ 15 問	6.6 問/ 16 問
平均正答率	千歳市	59.7%	37.6%
	全道	59.4%	39.1%
	全国	59.8%	41.5%
全道との比較		同様	ほぼ同様（下位）
全国との比較		同様	やや低い

< 千歳市の状況と課題 >

数学Bについては、ここ数年間、全国を4ポイント近く下回っていたが、今年度は-0.1ポイントと同様の成績となった。昨年度は「学習の領域」、「評価の能力」、「問題形式」の全てにおいて全国を下回っていたが、今年はいずれも全国と同様の結果となった。これまで弱いとされていた記述式の問題について、全国と比較し、昨年度-4.1ポイント、今年度-0.4ポイント差となり、大きく改善が図られている。問題形式別で比較すると、昨年度も今年度も記述式の出題が約4割だが、これらの問題の正答率の上昇が成績の向上に結びついた。また、図形の証明の問題など課題とされていた問題についての正答率は、全国と比較し、昨年度-4.2ポイントから今年度-1.9ポイントへと改善されている。また、この問題の無回答率の比較についても、昨年度-4.9ポイントから今年度-2.7ポイントと改善がみられる。グラフで示された事象に即して解釈する問題では、全国を6.5ポイント上回るなど、「数学的な見方や考え方」が身についてきていることを表わしている。数学Aが全国を3ポイント程度下回っていることと比べ、数学Bの成績が良好なことから、数学への関心や意欲を引き続き喚起しながら、基礎的・基本的な学習事項の確実な習得を進めることにより、総合的な向上が期待できる。

4．児童生徒質問紙の結果

小学校生活習慣

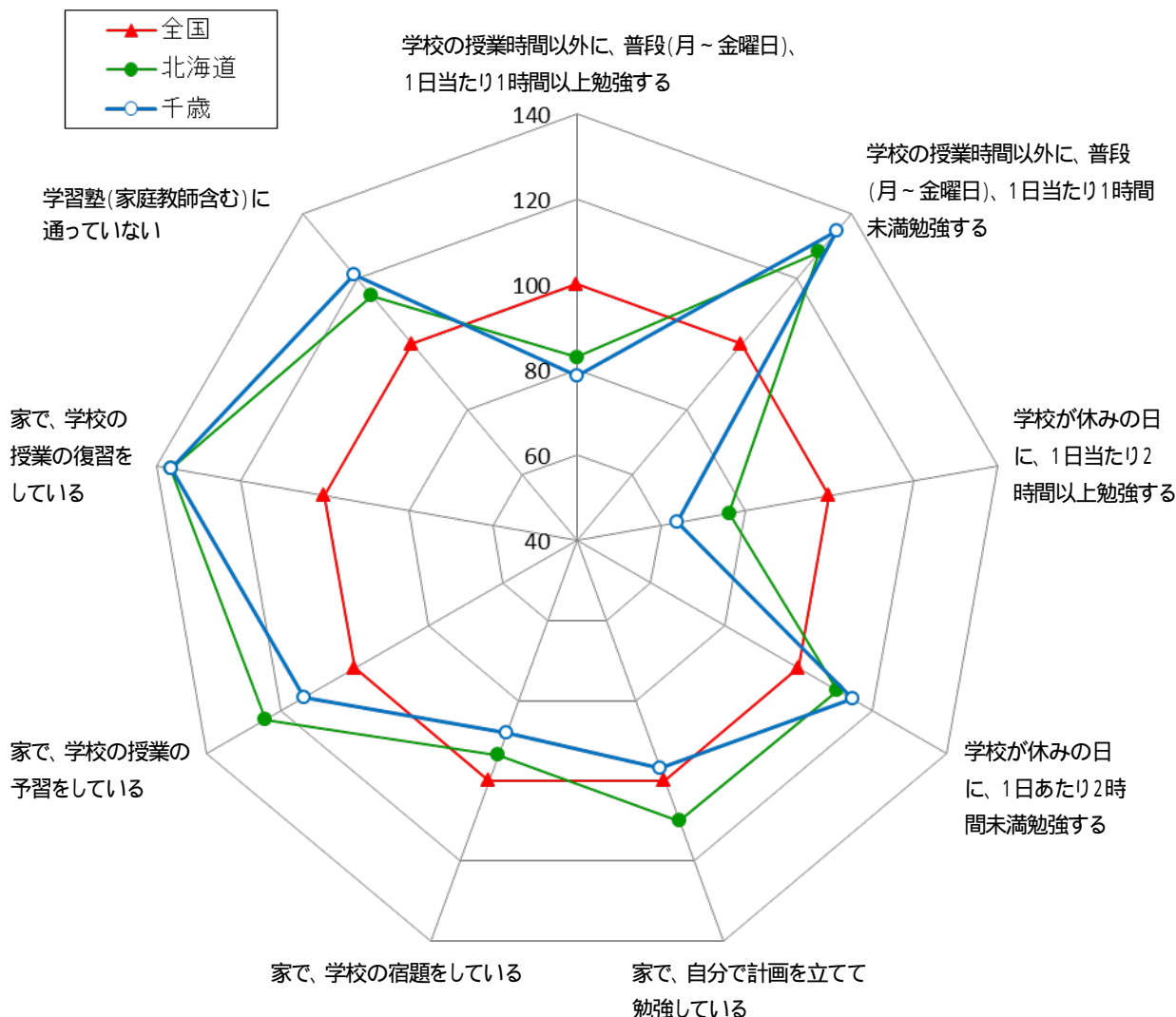


携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネット、ゲームをする時間が長く、就寝時刻がやや不規則な状況が見られる。

起床時刻や朝食の摂取については、全国と比較し、ほぼ同様となっているが、就寝時刻については、やや不規則な状況が見られる。また、テレビ視聴時間は全国とほぼ同様であるものの、家庭で携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間、ゲームに費やす時間については、2時間以上の割合が多いことから、携帯電話やスマートフォンでの通話やメール、ゲームをしたりする時間が長いという状況が見られる。

これらのことから、児童に規則正しい生活習慣を身につけさせる上で、時間の目安を決めて子どもの生活リズムを整えることが緊要な課題といえる。今後も規則正しい生活習慣の重要性について保護者や児童の理解を深めるとともに、学校が家庭との連携・協力を一層強化し、「生活規律の徹底」の取組を進めていくことが必要である。

小学校学習習慣



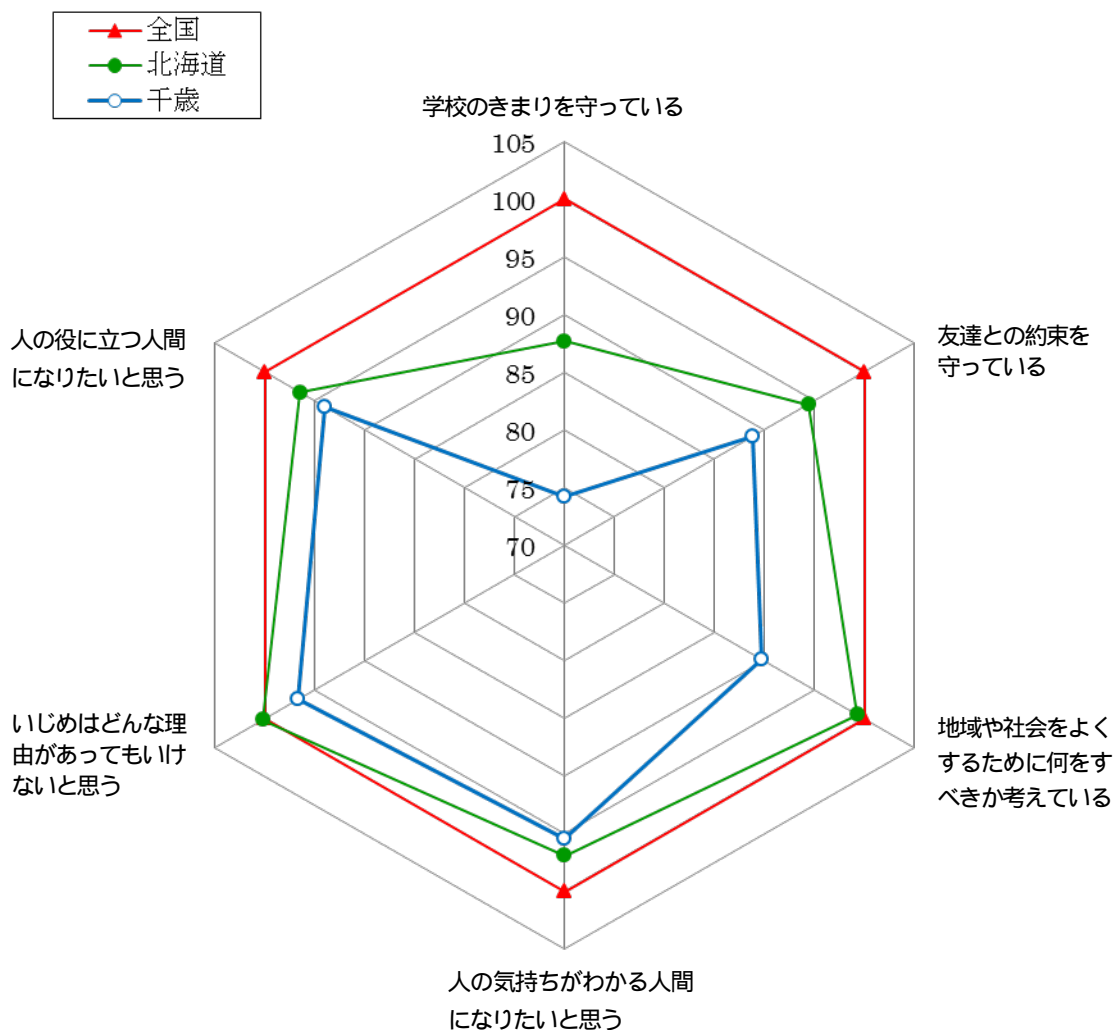
児童の学習意欲は高いが、家庭で学習に取り組む時間が短い状況が見られる。

平日、家庭での学習時間は、小学校高学年で1時間以上を基本ととらえているが、この基準を満たす児童は、全国と比較が少ない。1時間を超え2時間以上と学習時間が長くなるにつれ、その差は拡大している。また、学校が休みの日に、まとまった時間(2時間以上)学習に取り組むことも少ない。このような状況は、学習塾に通う割合が低いこともひとつの要因ではあるが、今後、市内各小学校が設定している家庭学習の時間を目安に学習に取り組む習慣を身に付けさせるとともに、学校が休みの日においても、1週間のまとめの学習などにじっくりと取り組ませるなどの手立てが必要である。

一方、「家で、自分で計画を立てて勉強している」「家で、学校の授業の予習をしている」「家で、学校の授業の復習をしている」という学習に対する意欲・関心・態度の設問に対しては、全国と同様か上回る結果となっており、学習意欲が高い状況が見られる。また、予習より復習を重視している実態が見られる。

これらのことから、家庭学習の仕方の指導や宿題を持たせるなど、児童の高い学習意欲を家庭学習の時間の増加に結びつける手立てを工夫する必要がある。

小学校規範意識



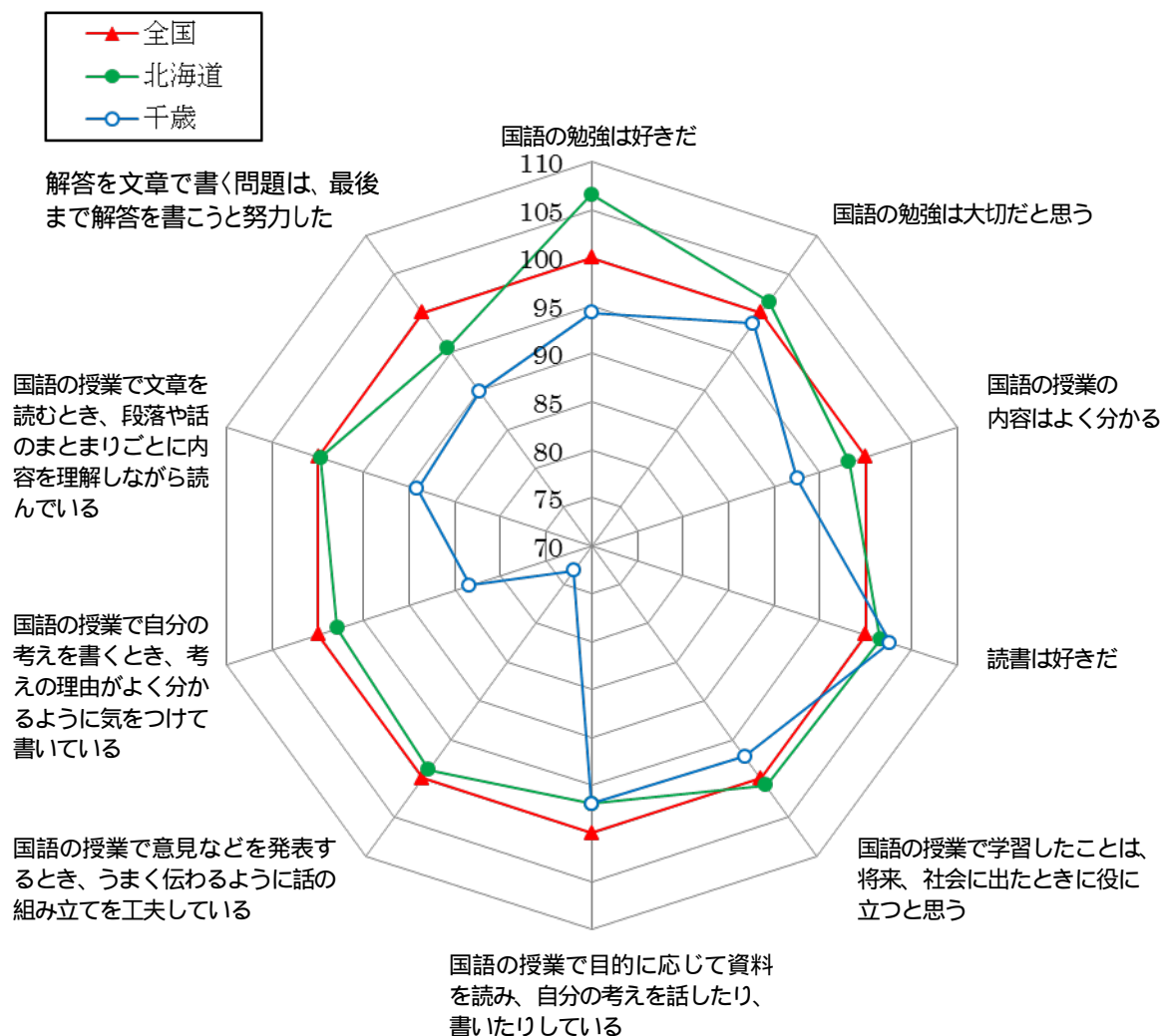
児童の規範意識や他者を思いやる心に課題が見られる。

規範意識については、全国に比べ低い状況が見られ、特に、規則の順守については、「学校のきまりを守っている」と回答した児童は、全国を25ポイント程度下回っている。また、「友達との約束を守っている」についても全国を10ポイント程度下回っており、児童の規範意識に課題が見られる。また、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えている」についても10ポイント程度下回っており、地域や社会の一員としての自覚についても課題が見られる。

他者理解については、「人の気持ちがわかる人間になりたいと思う」と回答した児童の割合と「いじめはどんな理由があってもいけない」と回答した児童の割合が全国を若干下回っており、他者を思いやる心やいじめに対する認識にやや厳しさが欠ける。

これらのことから、今後、市内各小学校が取組を進めている「生活規律の徹底」「学習規律の徹底」の取組の成果を検証しながら、子どもたちの規範意識を高め、きまりを守る態度を身に付けさせるとともに、いじめを許さない学級・学校風土づくりを進めていく必要がある。

小学校国語



言語や文字による表現を苦手と感じている状況が見られる。

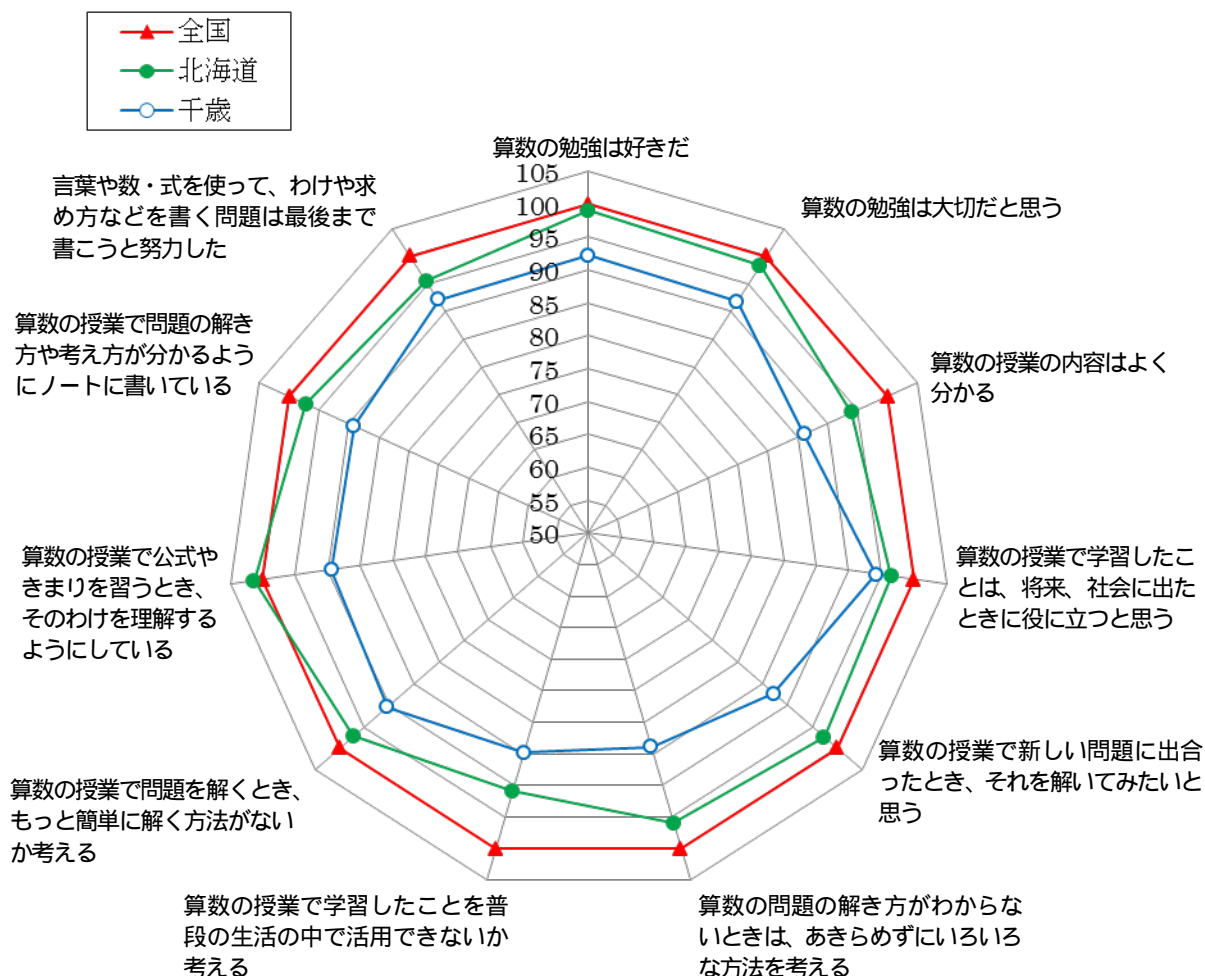
「国語の勉強は大切だと思う」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と答えた児童の割合は、全国とほぼ同様であり、児童が国語の学習の価値をとらえている状況が見られる。また、読書を好む児童は全国を上回り、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」という質問に対しても、全国とほぼ同様となっている。

一方、「国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がよく分かるように気をつけて書いている」と回答した児童の割合は、全国を大幅に下回っており、言葉や文字による表現を苦手と感じている状況が見られる。

さらに、「国語の勉強が好き」と回答した児童の割合と「国語の授業の内容がよく分かる」と回答した児童の割合が同程度であり、授業内容が分かることと好きになることの間に相関がある。このことは、算数科においても同様のことがいえる。

これらのことから、特に、話すこと、書くことの領域の授業において、単元を貫く言語活動を位置づけた授業づくりに取り組み、子どもにとって「わかる授業」を展開していくことが必要である。

小学校算数



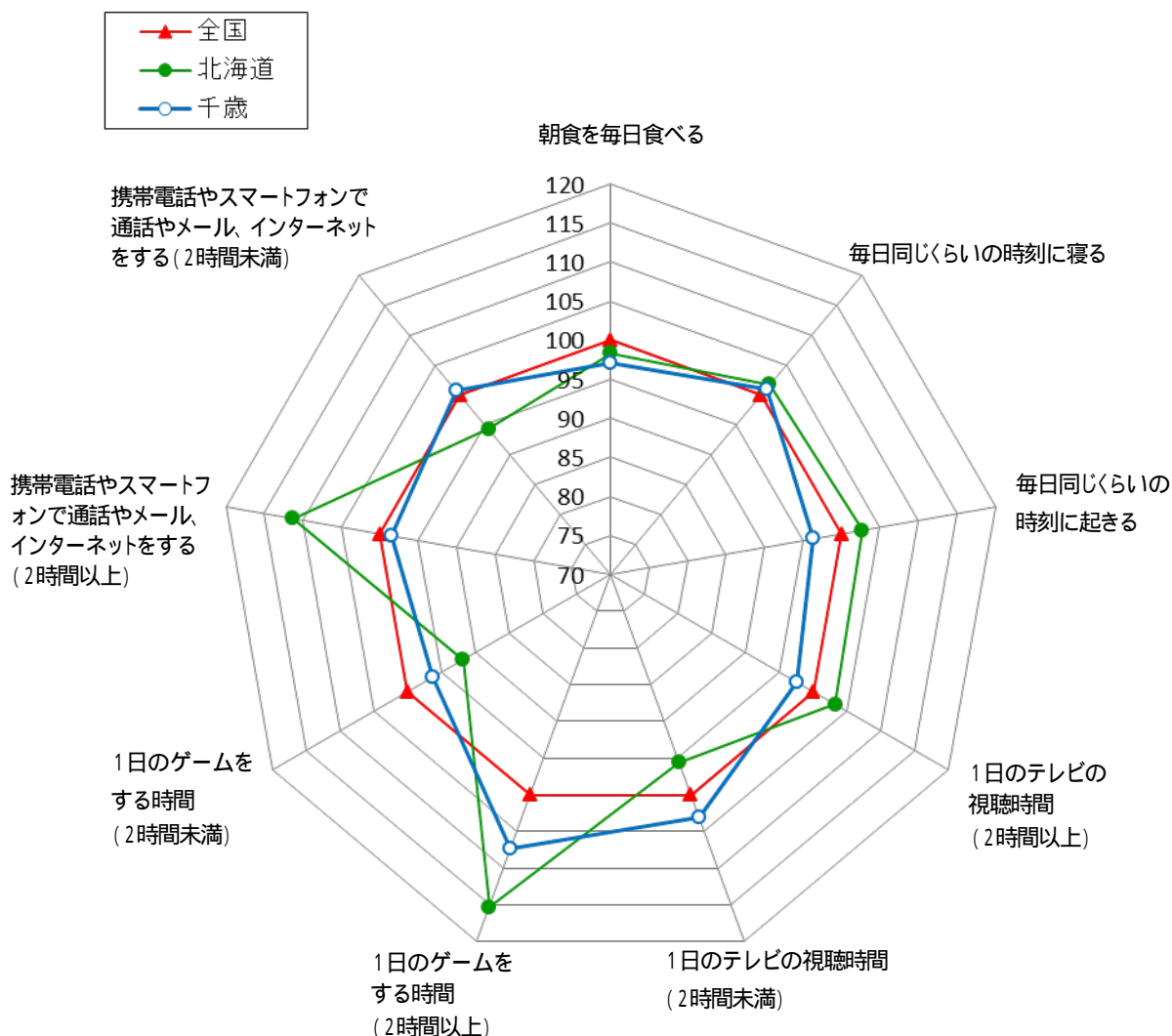
算数の学習に対する関心・意欲・態度に関するすべての質問項目について、全国と比較し、10～15ポイント下回っているが、大きく落ち込んでいる項目は見られない。

算数の学習に対する関心・意欲・態度に関するすべての質問項目について、全国と比較し、10～15ポイント下回っているが、大きく落ち込んでいる項目は見られないのが特徴である。

全国との差が10ポイント以上の項目の中で、「算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「算数の授業で新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたいと思う」「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」の3項目については、算数科の指導において特に重視しているものであり、算数的な活動や言語活動を取り入れた授業を積極的に展開するなど、一層の授業改善に取り組む必要がある。

また、算数は系統性の強い教科であることから、各学年の基礎的・基本的な内容を確実に習得させることが大切であり、スパイラルな指導にも十分力を注ぐ必要がある。

中学校生活習慣

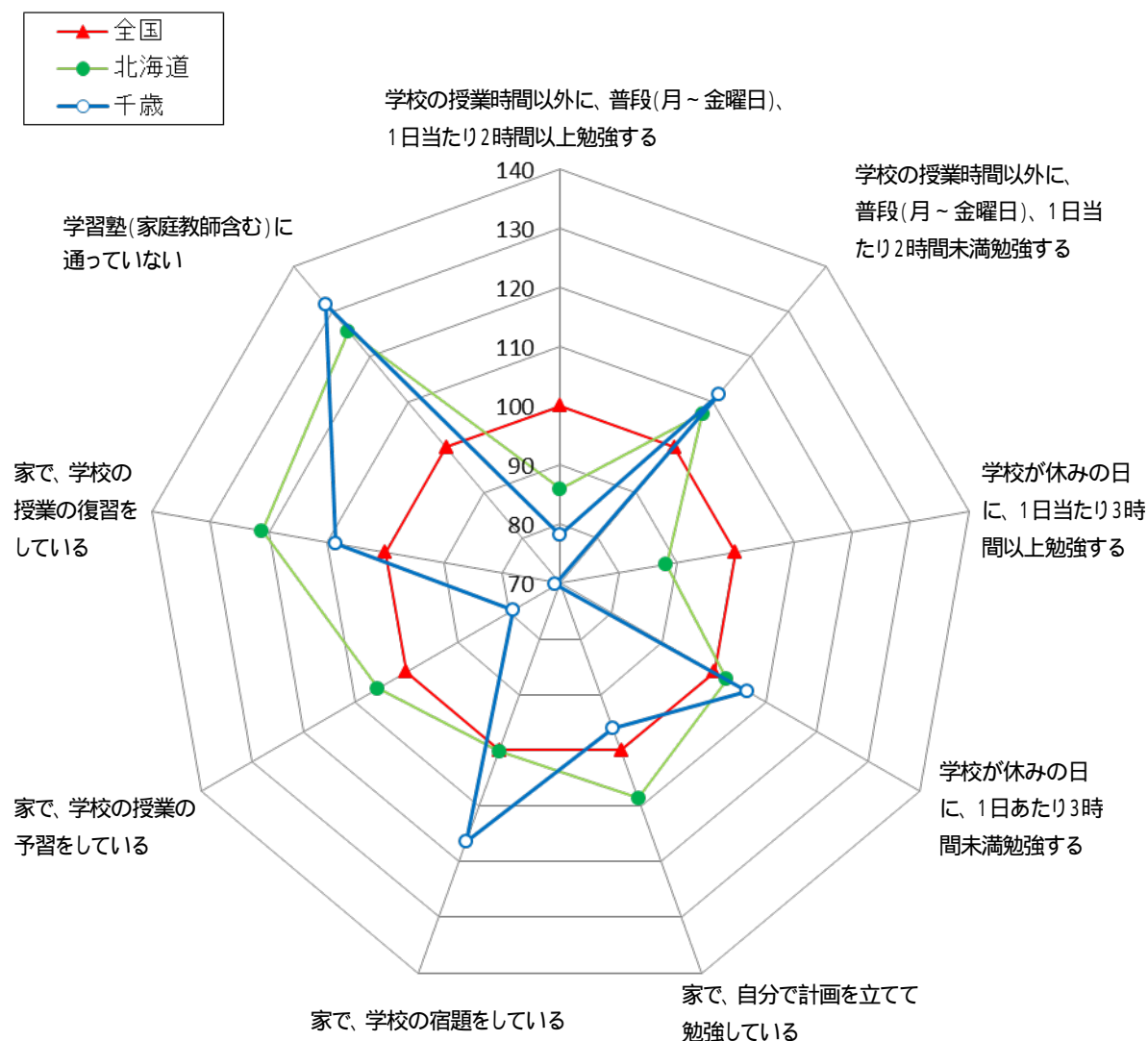


起床時刻が不規則でゲームをする時間が長い状況が見られる。

朝食の摂取や就寝時刻については、全国と比較し、ほぼ同様となっているが、起床時刻については、不規則な状況が見られる。一方、テレビの視聴時間については、全国と同様となっており改善が見られるが、ゲームに費やす時間については、2時間以上と回答した生徒の割合が全国を大きく上回っており、依然として長い状況が見られる。携帯電話やスマートフォンで通話やメール等をする時間については、全国とほぼ同様の状況となっている。

朝食の摂取、起床時刻、就寝時刻の状況は、小学校と同様の傾向を示しており、学校が家庭と連携を図り「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣を身につけさせるとともに、テレビの視聴時間やゲームをする時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメールをする時間の目安を決めて生徒の生活リズムを整えていくことが必要である。

中学校学習習慣



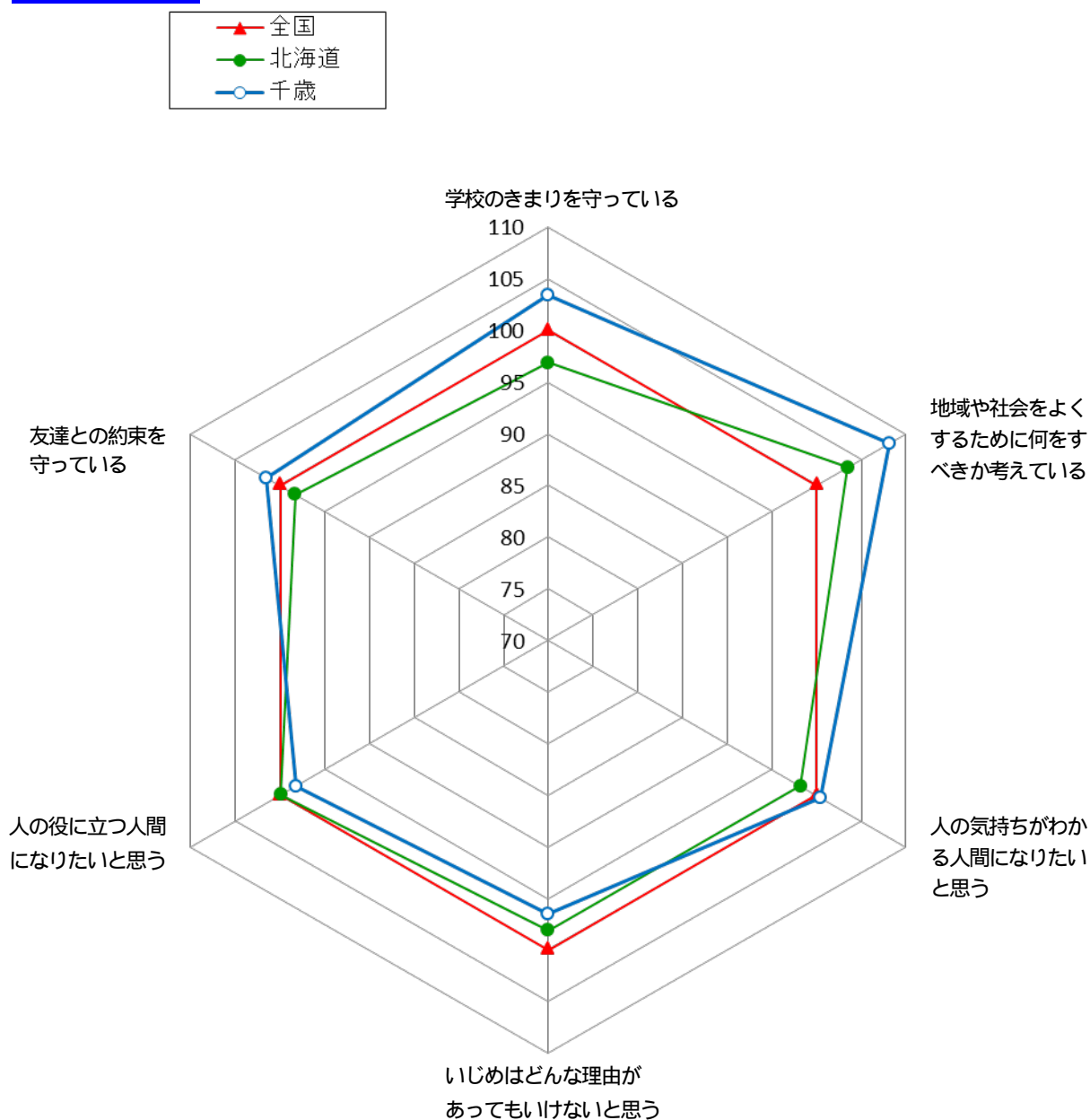
家庭での学習時間は短い、決められた課題にはまじめに取り組む状況が見られる。

家庭での学習時間については、平日2時間以上勉強する生徒は、全国と比較し20ポイントほど下回り、学校が休みの日についても、3時間以上勉強すると回答した生徒の割合は全国を大きく下回っている。また、質問項目から千歳市の生徒は、予習よりも復習を重視している実態が見られる。

一方、学習に対する関心・意欲・態度に関する質問項目については、「家で、学校の宿題をしている」「家で、学校の授業の復習をしている」と回答した生徒は、全国を上回っており、学習意欲が高い状況が見られる。

家庭での学習時間が少ない要因としては、学習塾に通う生徒の割合が低いこともひとつと考えられるが、宿題や授業の復習には、きちんと取り組む市内中学生のよさを生かし、宿題や週末課題を持たせたりなど、机に向かう手立てを工夫し、市内各中学校が設定している家庭学習の時間を目安に、学習に取り組む習慣を身に付けさせる取組を今後も進めていく必要がある。

中学校規範意識



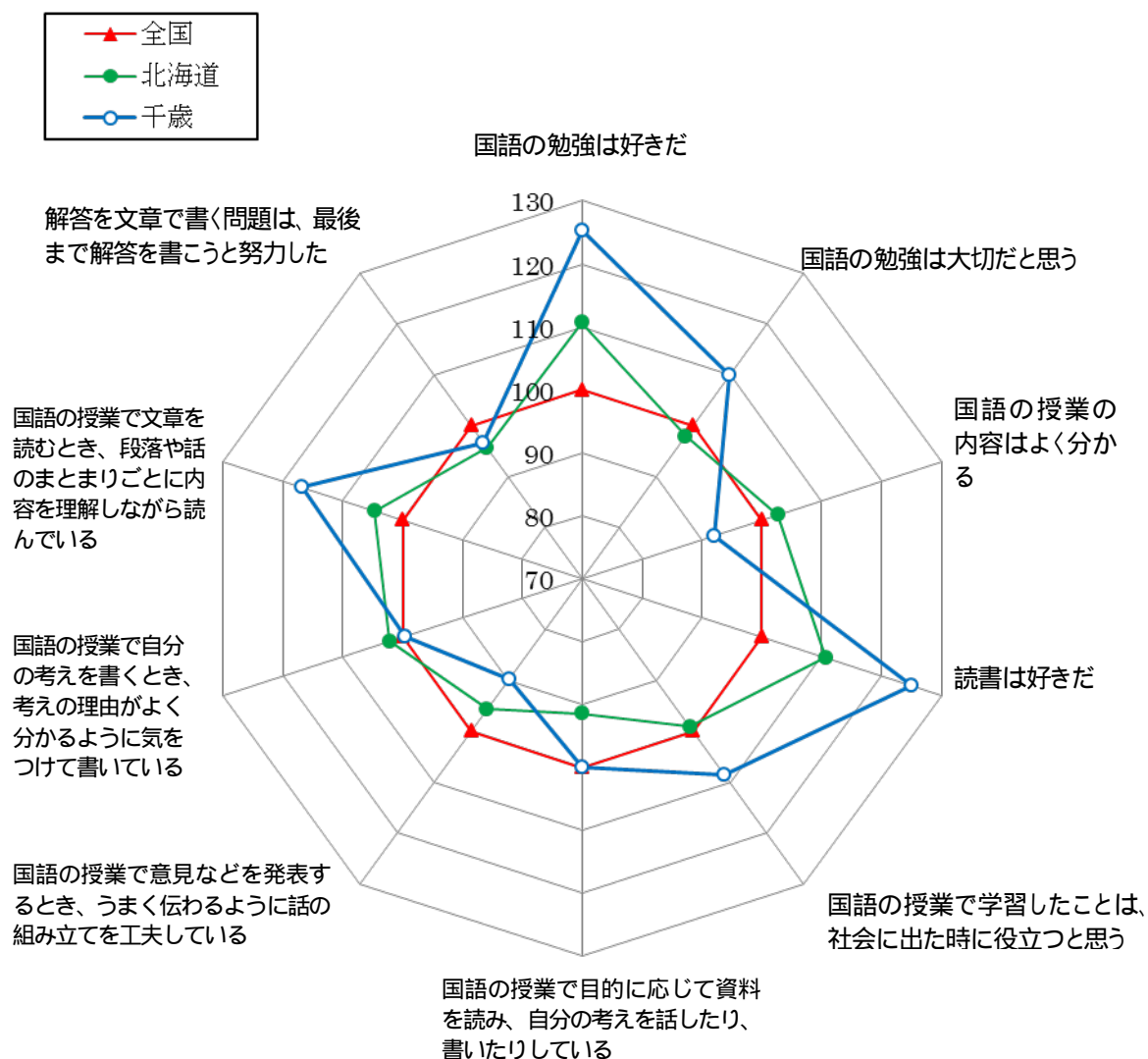
学校の規則や友達との約束をしっかり守っている様子が見られる。

規則の順守に関する2つの設問については、2項目ともに全国を上回っており、学校の規則や友達との約束をしっかり守っている様子が見られる。

他者理解については、「人の気持ちがわかる人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は、全国と同様であるが、「人の役に立つ人間になりたいと思う」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した生徒は全国を若干下回っている。この傾向は小学校と同様であるが、いじめに対しては、「いじめは絶対許されない」との認識を全生徒に持たせることが必要である。

「人の気持ちを理解し、人の役に立つ人間になりたい」と意欲的に生活する生徒の姿は、学校生活や家庭生活の中ではぐくみたい大きな目標の一つであり、これは学習に臨む姿勢にも大きく影響するものであることから、今後もそれを高めていく手立てを講じる必要がある。

中学校国語



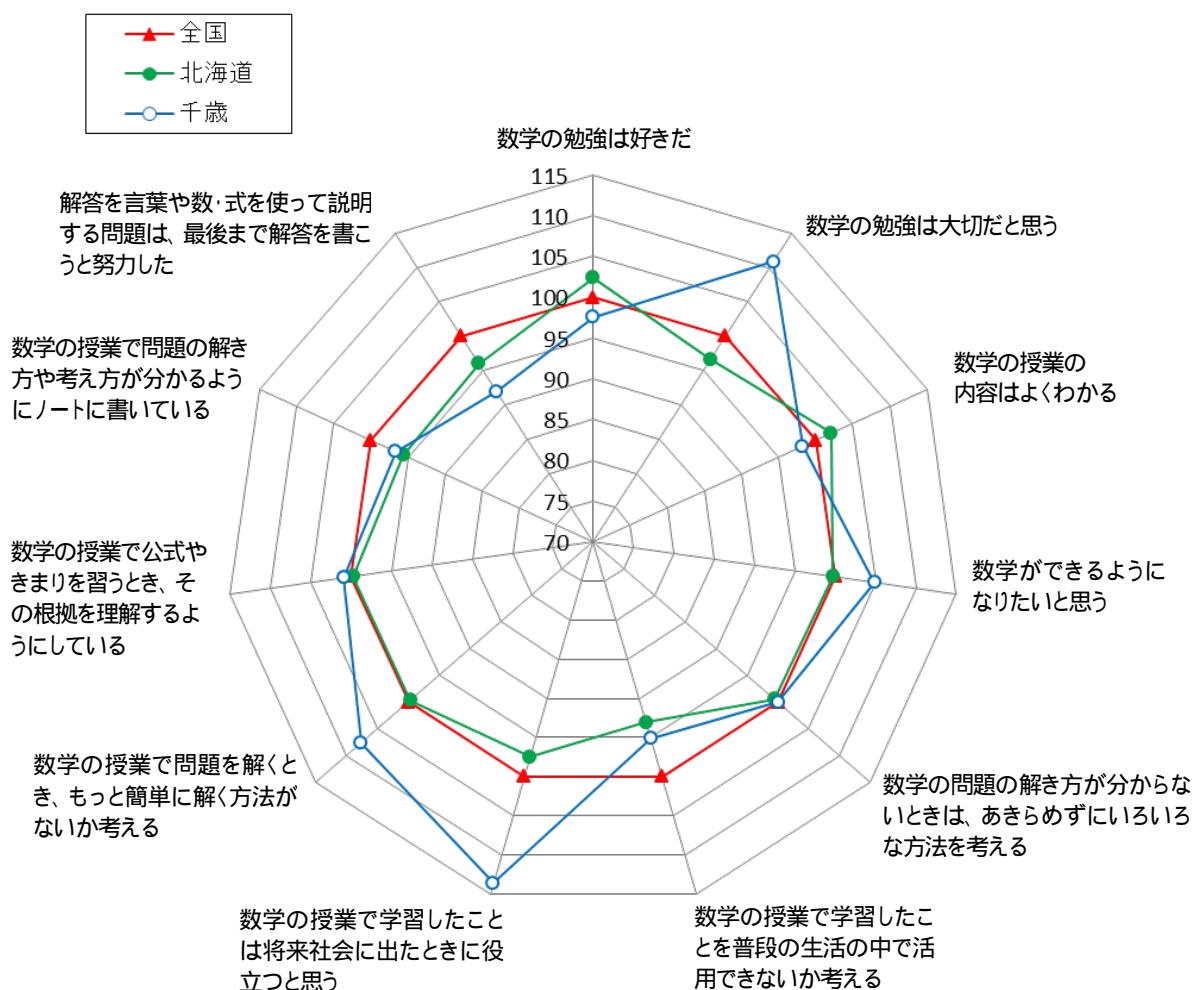
国語への関心・意欲・態度は、全国・全道平均よりも高く、読書も含めて国語に関して好ましい傾向にある。

国語に対する関心・意欲・態度は、全国よりも高く、読書も含めて国語に関して好ましい傾向にある。読書が好きな生徒が多いのは、毎日、学校で朝読書を行っている成果と思われる。

このような中であって、「国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」の設問については、全国を下回ったが、「根拠をあげながら話し合う力」の育成は、全国共通の課題であり、本市の生徒に限ったことではない。

今後、単元を通して身に着きたい力（単元目標）とそれに関する評価基準を明確にし、単元を貫く言語活動を中心に指導計画や本時の展開を構想するという基本的な流れを大切に、国語科の指導の充実を図っていくことが必要である。

中学校数学



数学に対する関心・意欲・態度については、全国を上回る項目が多く、好ましい傾向が見られるが、解き方や考えを分かるようにノートに書くことや学習内容の活用を考えることに課題が見られる。

数学に対する関心・意欲・態度については、「数学ができるようになりたいと思う」「数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」の質問項目で全国とほぼ同様、または上回っており、好ましい傾向にある。中でも、「数学の勉強は大切だと思う」「数学の授業で学習したことは将来社会に出たときに役立つと思う」と回答した生徒は、全国を大きく上回っており、数学を勉強する意義や価値を理解している生徒が多い。

その一方で、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」「数学の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」と回答した生徒は、全国を下回っており、数学的な表現力や活用力の育成が課題となっている。

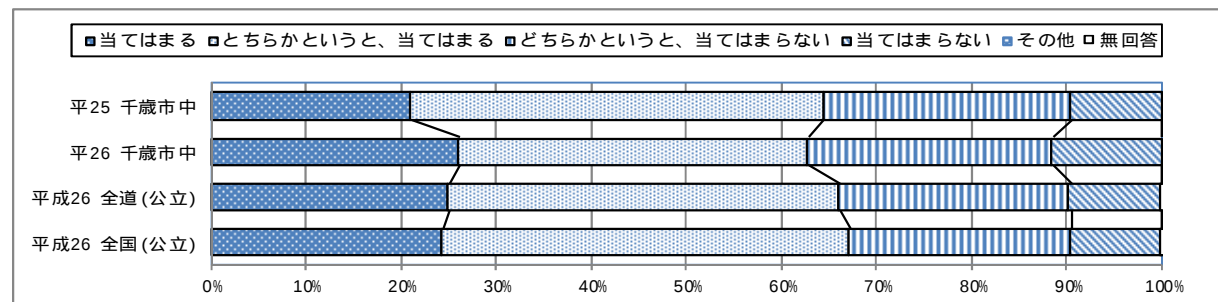
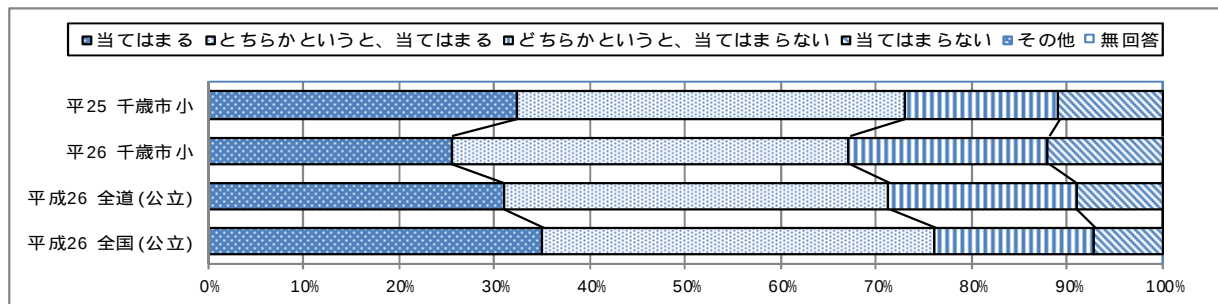
そのため、今後は、自分の考えをノートにまとめて「書く」活動を重視した授業、考え抜くことの楽しさや成就感・達成感を味わわせる授業を実践する必要がある。

レーダーチャートに用いた児童生徒質問紙の詳細な結果は、以下のとおりである。

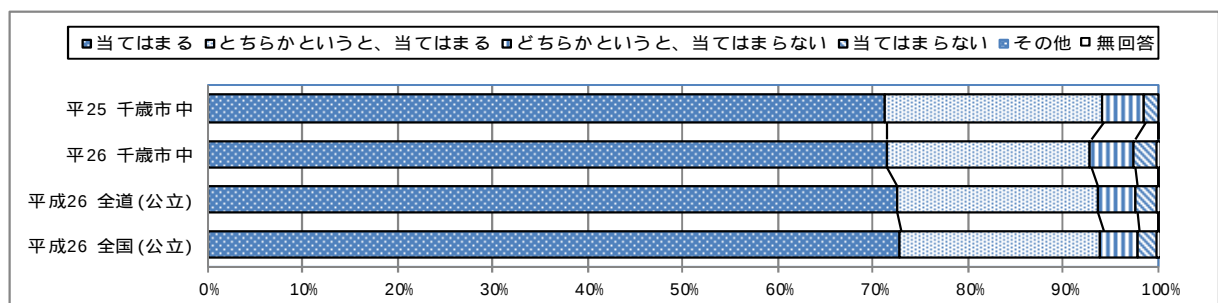
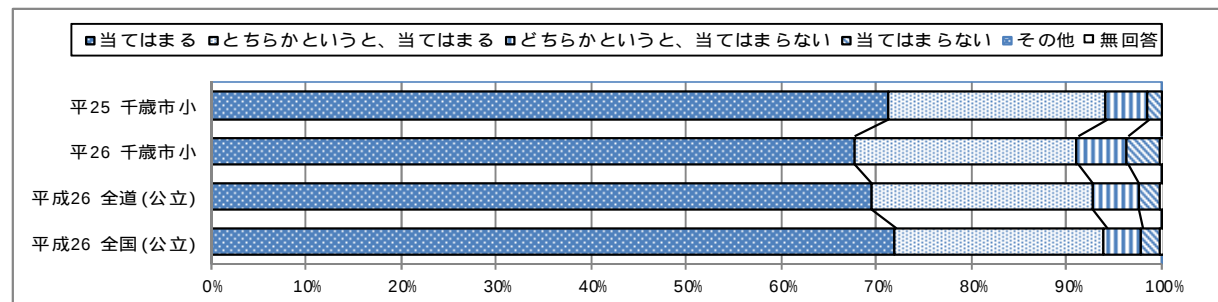
自己肯定感

自分のよさを感じている児童生徒が比較的少ない傾向が見られる。

質問番号	質問事項
(1)	自分には、よいところがあると思いますか



質問番号	質問事項
(1 - 2)	人の役に立つ人間になりたいと思いますか



「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に対し、小学校、中学校ともに「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合が昨年度と比較して減少している。（小学校：昨年：73.0%、今年：67.1%、中学校：昨年：64.4%、今年：62.8%）

全国と比較しても、小学生は昨年度が2.7%であった差が、今年度は5.9%に拡大している。また、中学生についても、昨年度2%であった全国との差が、今年度は4.3%に拡大している。

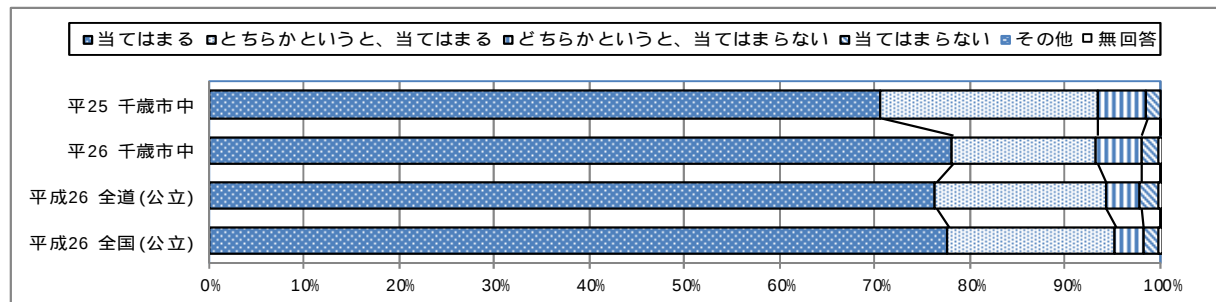
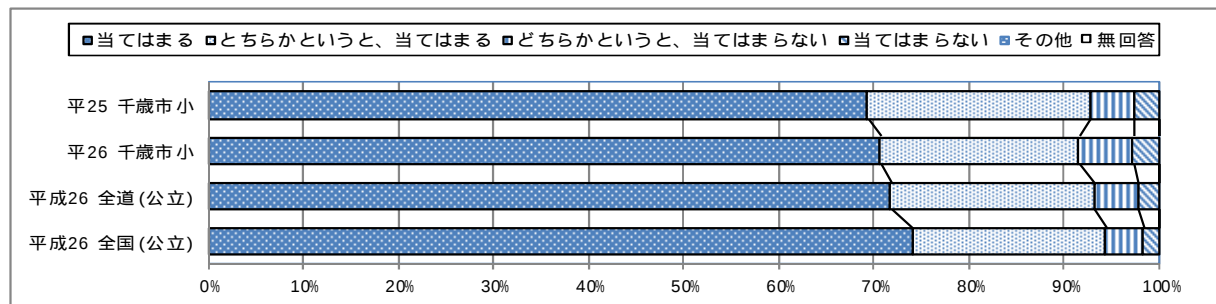
また、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる。どちらかといえば当てはまる」と回答した小学校児童は91.1%、中学校生徒は92.9%であり、全国（小94.0%、中94.0%）を下回っている。

自分のよさを感じて、人の役に立つ人間になりたいと意欲的に生活する児童生徒の姿は、学校生活や家庭生活の中ではぐくみたい大きな目標の一つであり、これは学習に臨む姿勢にも大きく影響するものであることから、自己肯定感の低い原因を探り、それを高めていく手立てを講じる必要がある。

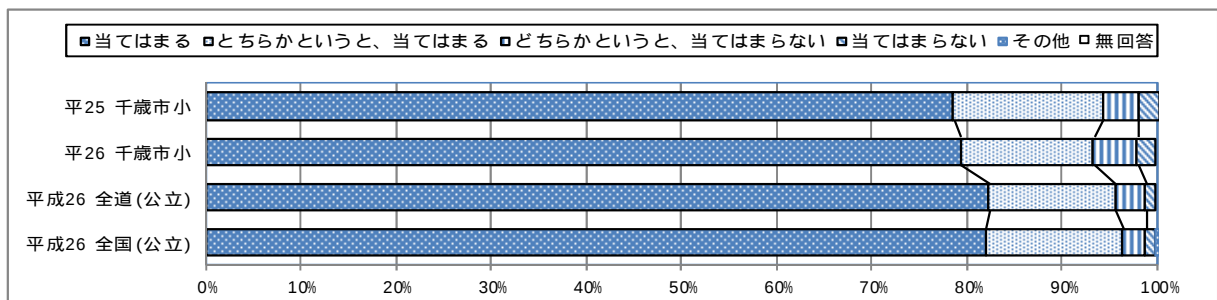
他者を思いやる心

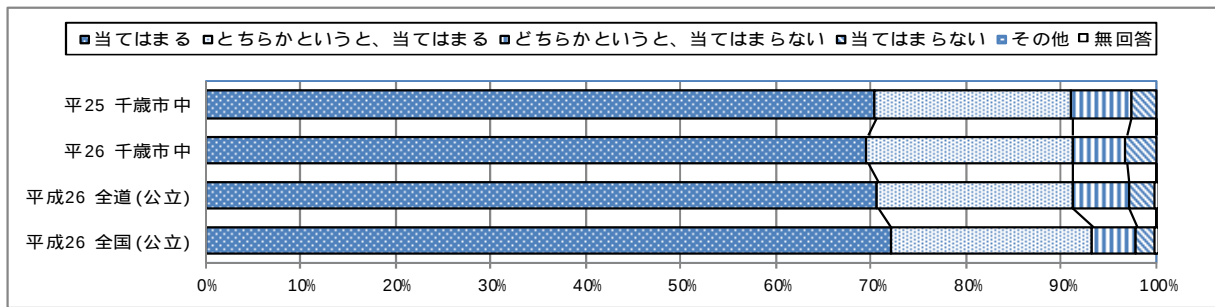
いじめに対する認識がやや厳しさに欠ける傾向が見られる。

質問番号	質問事項
(2)	人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか



質問番号	質問事項
(2 - 2)	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか





「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる。」と回答した児童は、91.1%と前年度と同様であったが、全国との比較では、3.1%下回っている。中学生については、92.9%で前年度を若干上回ったが全国を1.1%下回っている。

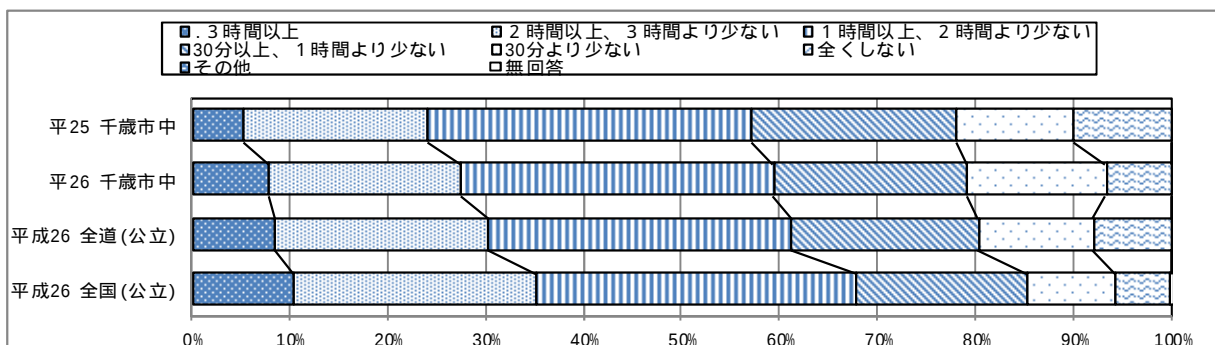
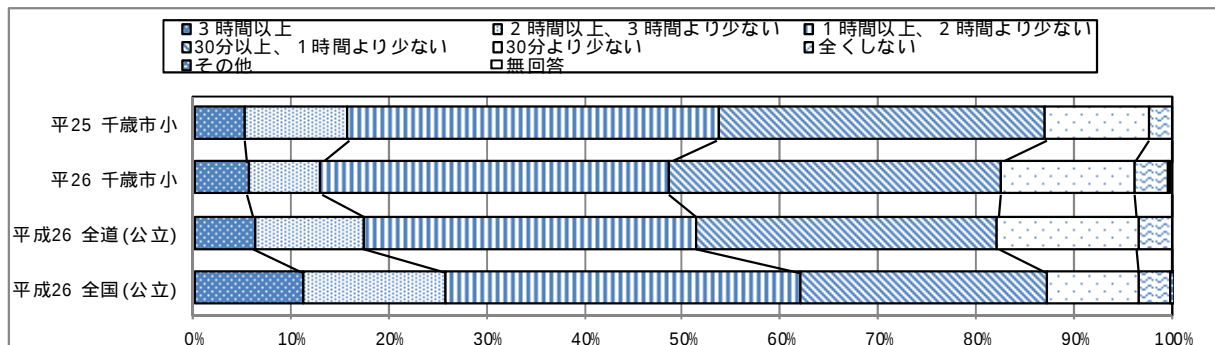
また、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問に対し、「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる。」と回答した児童は、94.3%で昨年度を0.9%下回り、全国と比較しても2%低くなっている。中学生では91.3%と昨年度と同様であったが、全国との比較では2.1%低い。

2つの質問に対する肯定的な回答は小中学校ともに90%を超えて高い水準となっているが、100%になるよう、いじめは、いかなる理由があろうとも人として絶対許されないことであることや他者を思いやる心を日常生活の具体的な事例を通して指導していく必要がある。

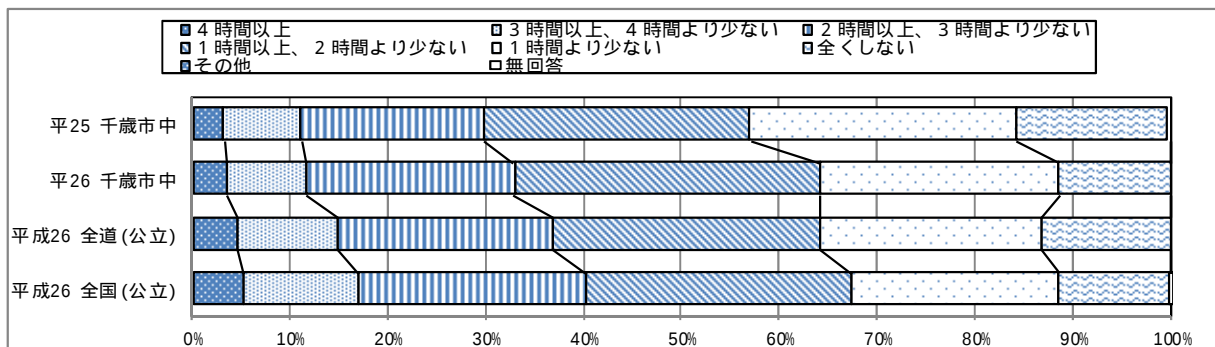
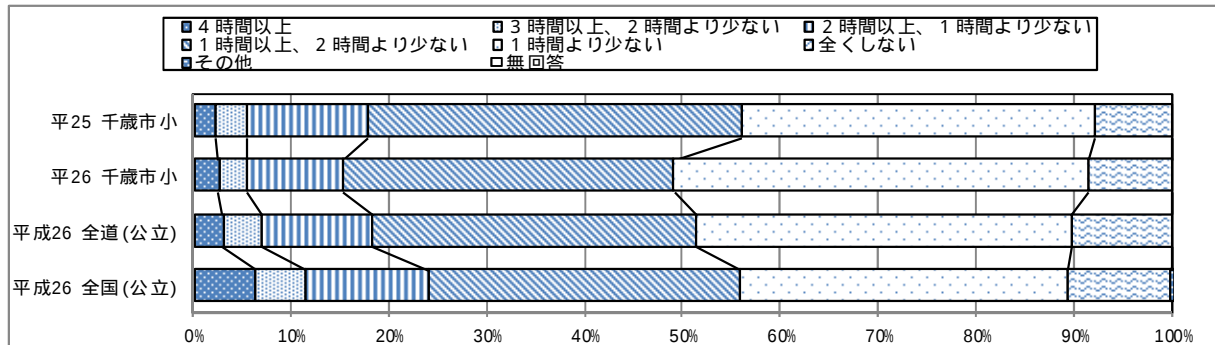
家庭学習の時間

一部努力の跡は見られるが、依然として家庭学習の時間が少ない状況が見られる。

質問番号	質問事項
(3)	学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む)



質問番号	質問事項
(3-2)	土曜日や日曜日などの学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）



「学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾や家庭教師含む）」という質問に対し、「1時間以上勉強している」児童の割合は、全国が62.0%で千歳市は48.6%となっている。

小学校6年生としての最低必要な学習量である「1時間以上、2時間より少ない」に限定してみると、全国36.2%、千歳市35.6%と差は少なく、2時間以上学習する児童が全国に比べ少ない状況が見られる。また、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した千歳市児童の経年変化を見ると、昨年の37.8%に対し今年は35.6%と減少している。

中学生についても、「2時間以上勉強している」生徒の割合は、全国が35.1%、千歳市27.5%と差は7.6%となっている。中学3年生として最低必要な学習量「2時間以上、3時間より少ない」に限定して見てみると、全国は24.1%、千歳市19.7%となっているが、千歳市の経年変化では、昨年の18.8%に対して今年度は19.7%となっており0.9%増えている。

また、土曜日や日曜日など学校が休みの日に1日当たり「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童は、昨年より少なく（昨年：12.4%、今年：9.9%）全国との差も広がっている。

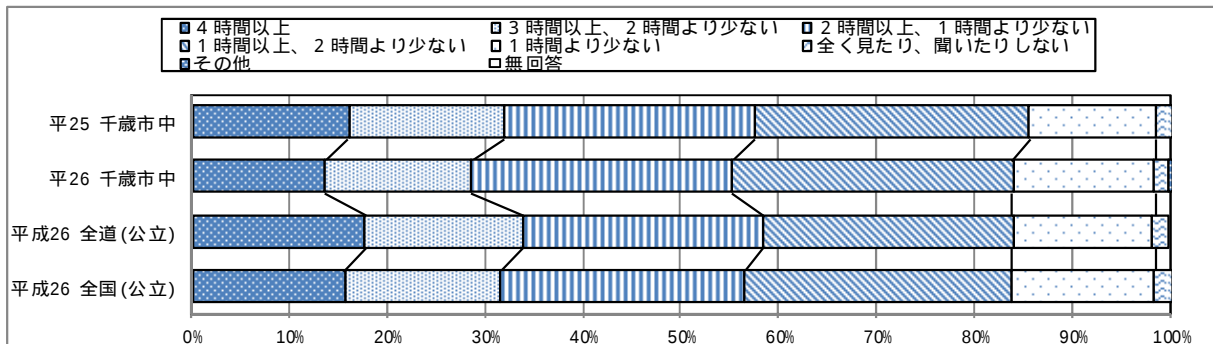
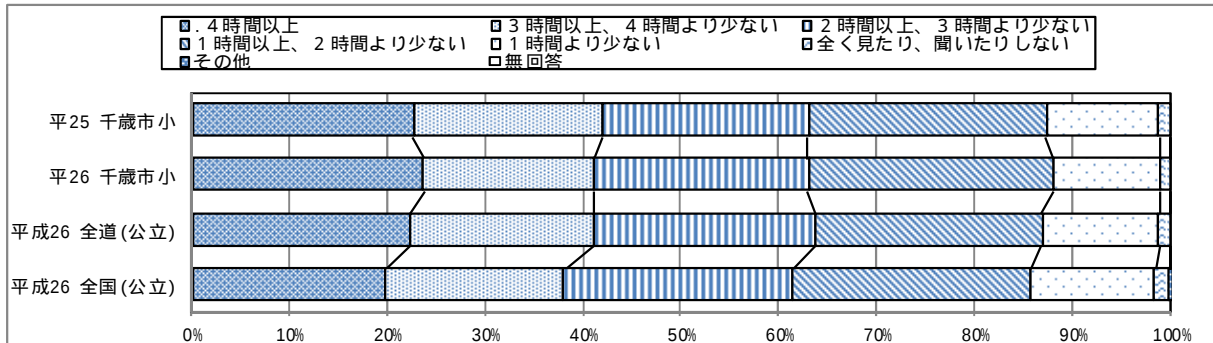
一方、中学生は、昨年度よりも増加しており（昨年：18.7%、今年：21.3%）全国の差もわずかとなっている。

家庭学習の時間については、昨年度よりも努力の跡が見られるが、依然として家庭学習の時間が少ない状況が見られることから、学習意欲を喚起する手立てを工夫するとともに、家庭の協力を得ながら毎日机に向かう習慣づくりを今後も粘り強く行う必要がある。

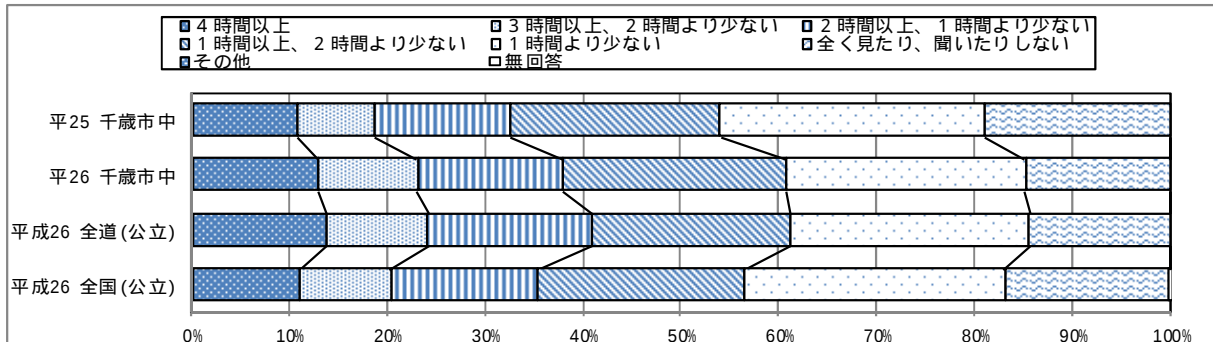
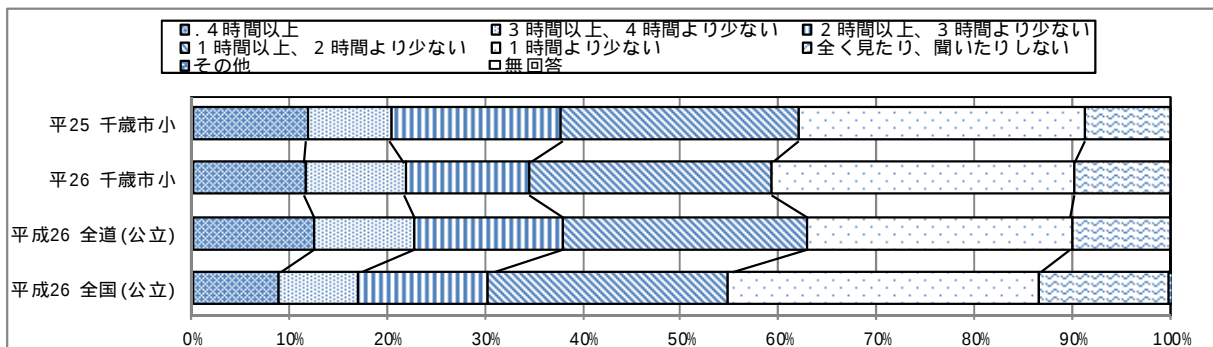
テレビやビデオ、テレビゲームなどの時間

中学校においてはテレビの視聴時間に改善が見られるが、テレビやビデオ、テレビゲームに費やす時間は、小学校・中学校ともに総じて多い傾向が見られる。

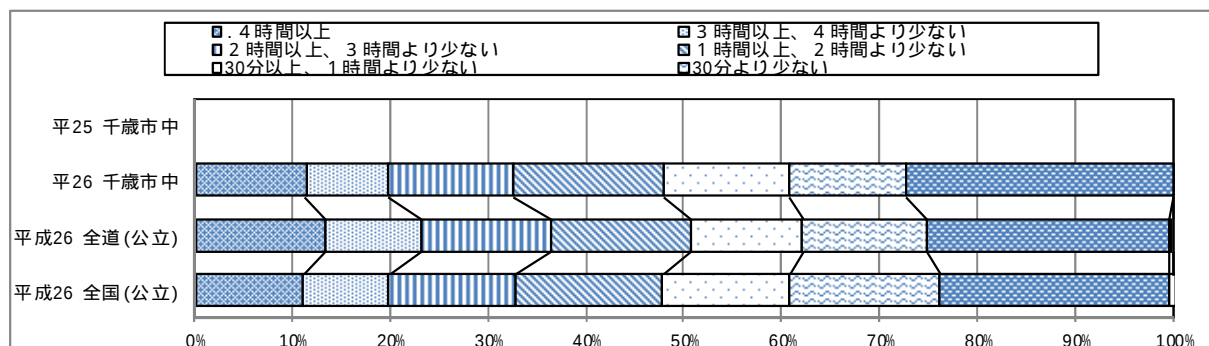
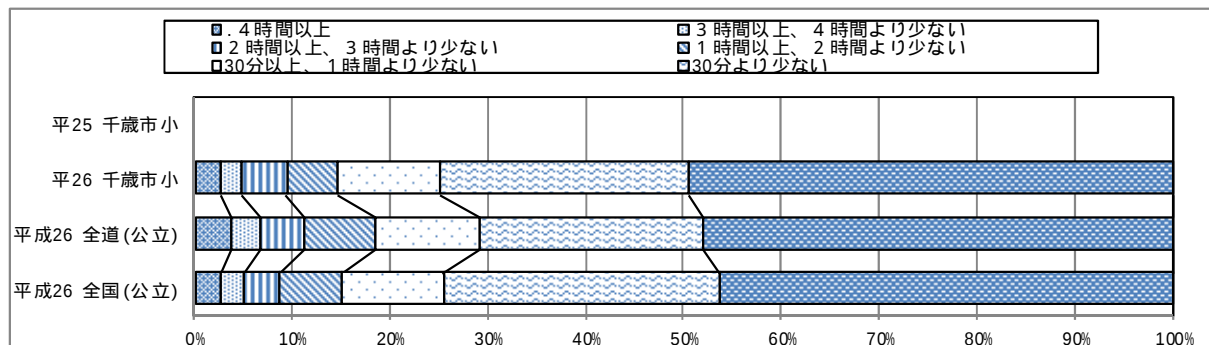
質問番号	質問事項
(4)	普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか(テレビゲームをする時間は除く)



質問番号	質問事項
(4-2)	普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲーム含む)をしますか



質問番号	質問事項
(4 - 3)	普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか。(携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間は除く) (平成26年度新規質問項目)



「普段(月～金曜日)1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか(テレビゲームを除く)」という質問に対し、「4時間以上」と回答した児童は23.7%で昨年度より1%増えているが、中学生では13.6%で前年度より2.5%少なくなった。

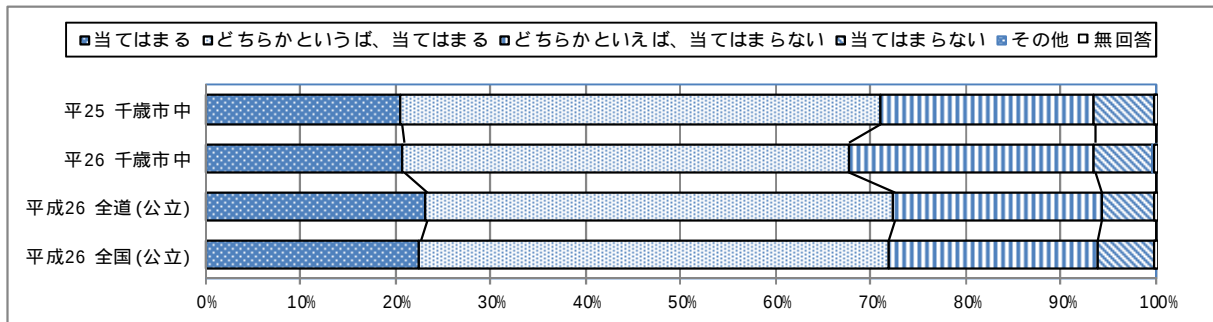
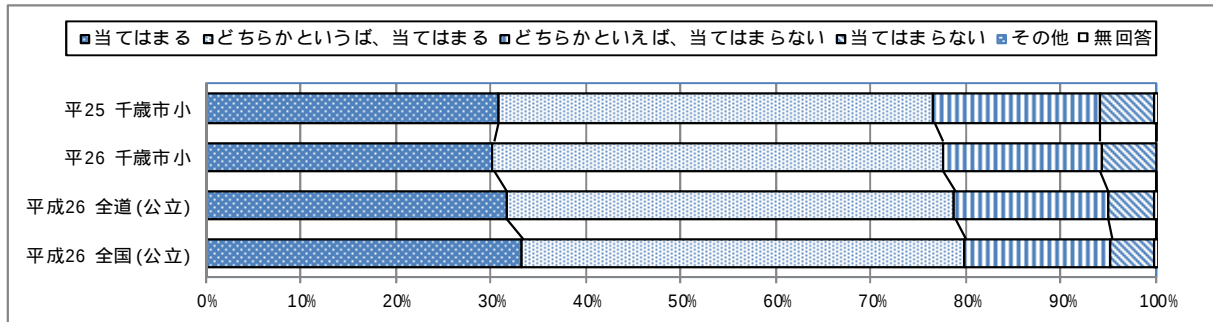
テレビゲームに限定すると、「2時間以上」と回答した児童は43.4%で昨年よりも3.2%少なくなっている。中学生は38%で昨年よりも5.4%増えている。

また、本年新たに加えられた「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間」については、「2時間以上」と回答した児童は、9.5%で全国より0.8%多く、中学生は、32.2%で全国より0.5%少ない。

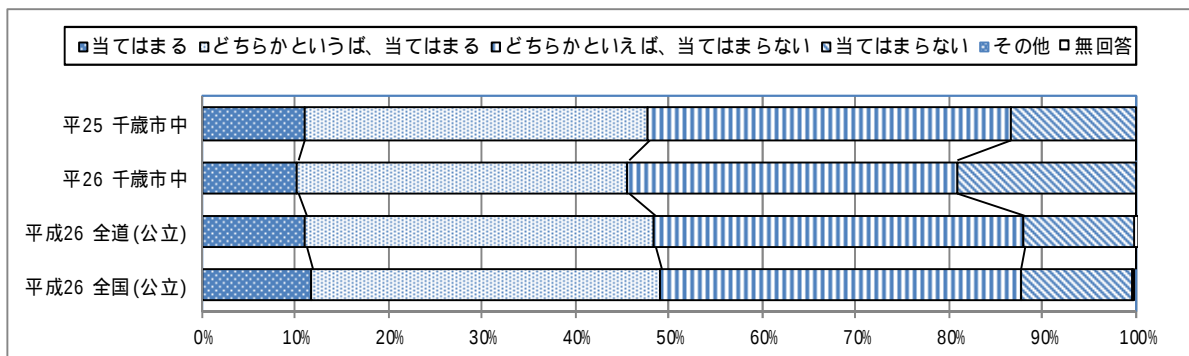
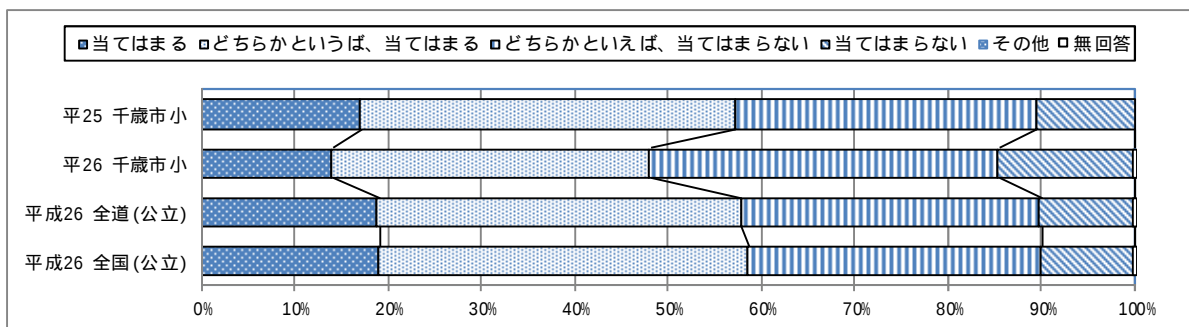
テレビやビデオ、テレビゲームなどに費やす時間については、中学校においてはテレビ視聴時間に改善が見られるものの、小学校・中学校ともに総じて多い傾向が見られる。今後は、携帯電話やスマートフォンの使い方を含めた家庭での過ごし方のルールをつくり、規則正しい生活を送る態度を育て、習慣化につなげていく必要がある。

学習内容がよくわかり、内容を日常生活に活用しようとする姿勢
算数・数学の学習内容が十分理解できていない状況や「学習したことを活用しようとする」意欲が低い状況が見られる。

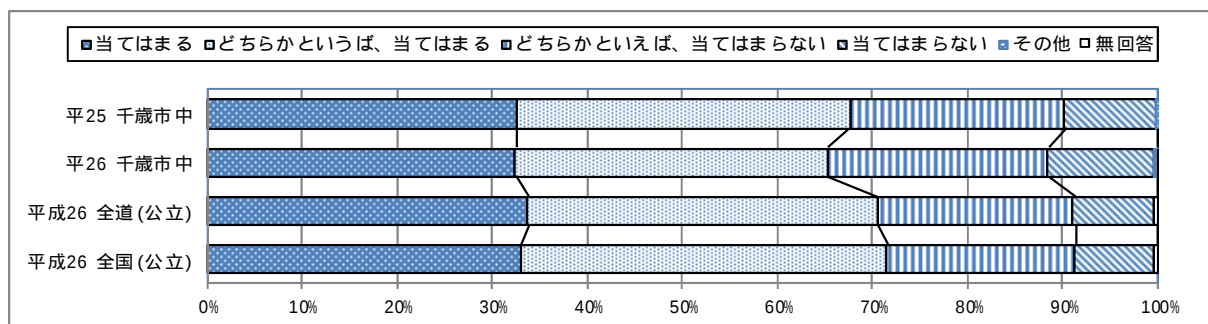
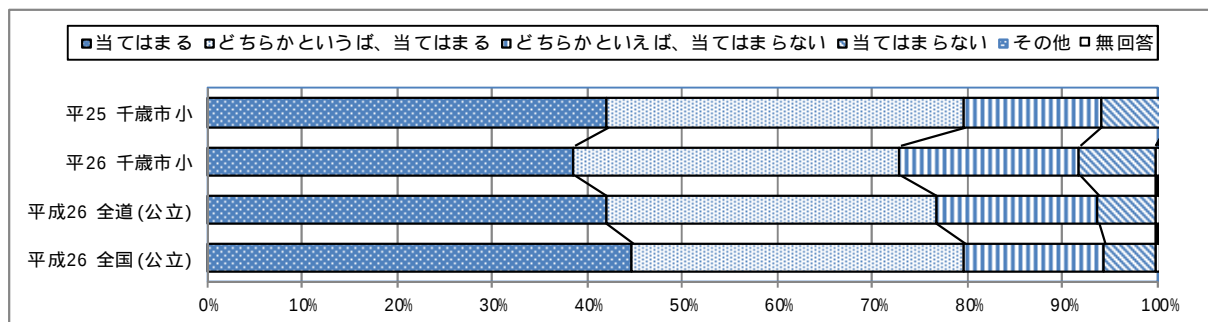
質問番号	質問事項
(5)	国語の授業の内容はよく分かりますか



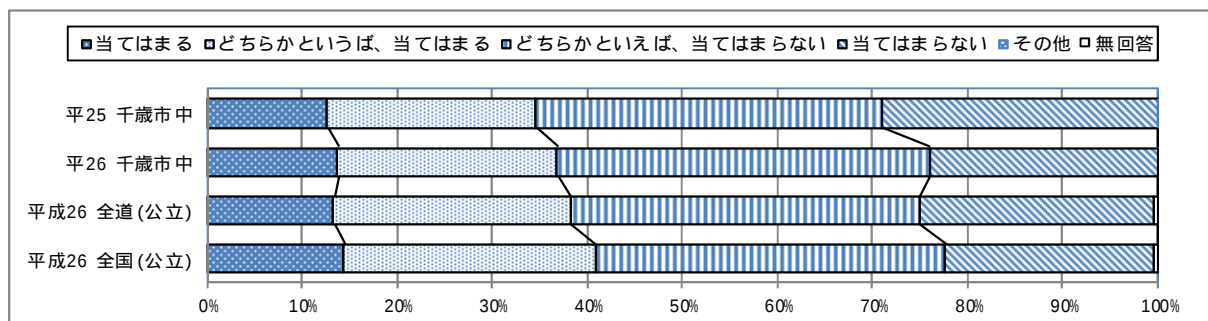
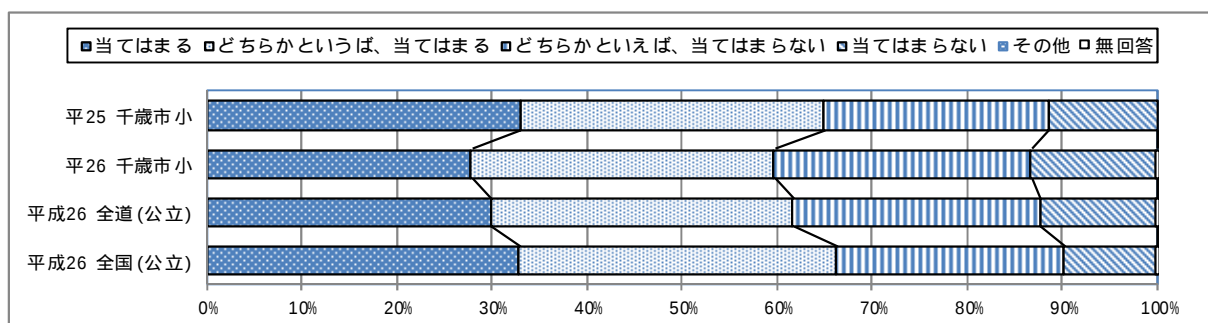
質問番号	質問事項
(5 - 2)	国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか



質問番号	質問事項
(5 - 3)	算数・数学の授業の内容はよく分かりますか



質問番号	質問事項
(5 - 4)	算数や数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか



「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、小学校では「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は76.6%で、昨年度より1.0%下回ったが、全国との差は2.7%と前年度とほぼ同様であった。

中学校は67.7%で昨年度を3.4%下回り、全国との差も4.3%（昨年0.8%）と広がった。また、「国語

の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか」という質問に対し、小学校では「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は48.1%で、昨年度を9.2%下回っており、中学校でも45.6%で、昨年度より2.2%下回っている。

さらに、「算数・数学の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、小学校では「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は72.9%で昨年度を6.7%下回り、全国との差は6.7%（昨年：0.6%）と広がっている。中学校は65.3%で昨年度を2.4%下回った。

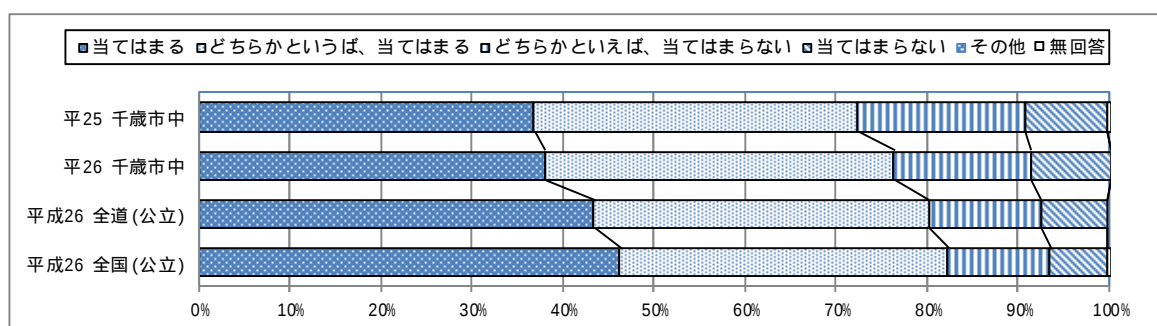
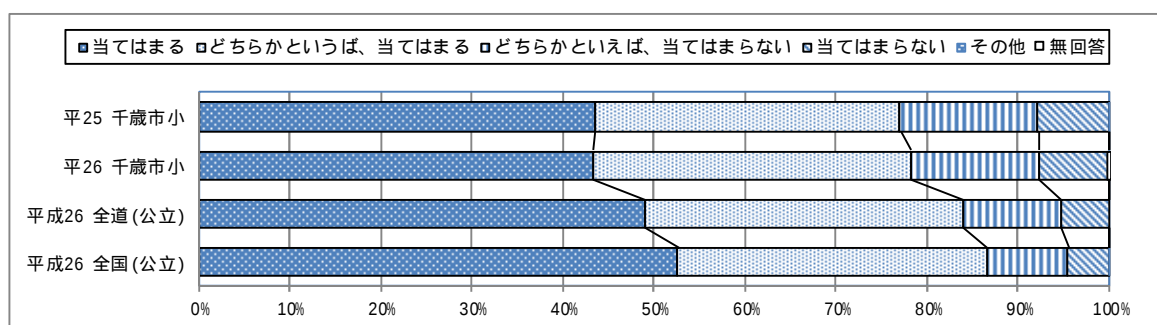
「算数・数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」という質問に対しては、小学校では「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は59.6%で昨年度を5.3%下回り、全国との差も6.7%（昨年：1.3%）と広がっている。中学校では36.6%で昨年度を2.2%上回ったものの、全国との差は4.1%（昨年：3.3%）と広がっている。

今後も、児童生徒の意欲・関心を高める授業を工夫するとともに、授業の中で意図的に生活に密着した題材を取り入れていく必要がある。

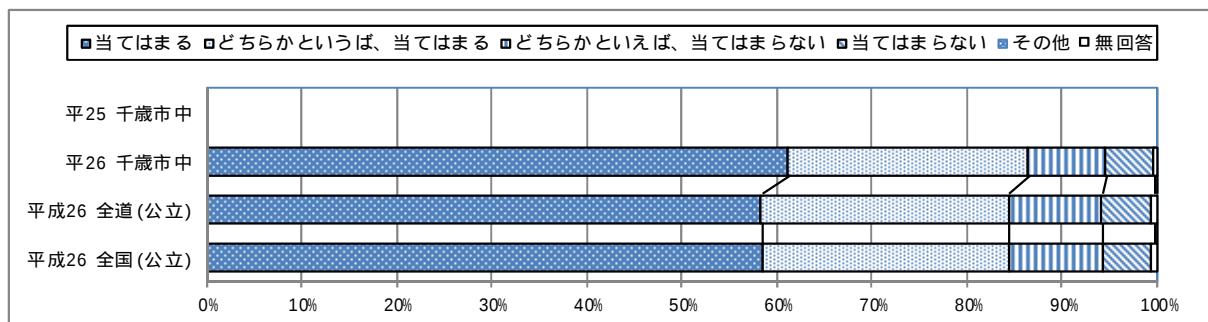
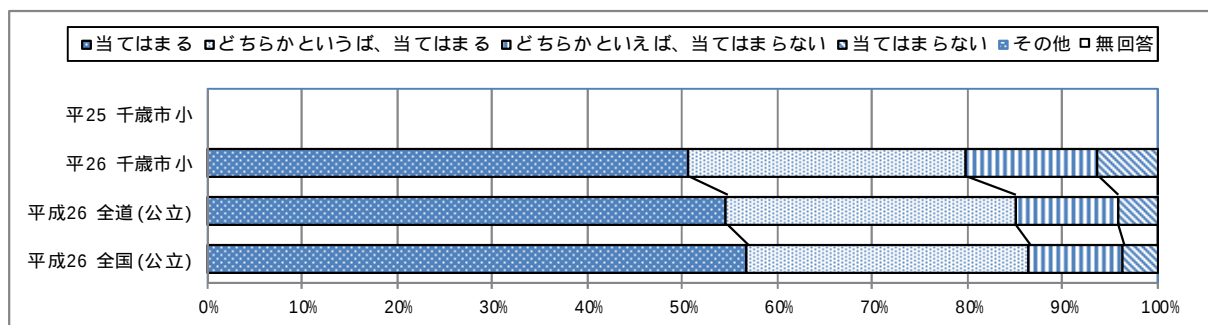
学級への所属意識・安心感

学級への所属感を感じている児童生徒が少ない傾向がある。

質問番号	質問事項
(6)	学校に行くのは楽しいと思いますか



質問番号	質問事項
(5 - 2)	学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか (平成26年度新規質問事項)



「学校に行くのは楽しいと思いますか」という質問に対し、小学校では「そう思う。どちらかといえば、そう思う」と回答した割合は78.0%で、全国よりも7.9%低い。中学校では72.4%で、全国を8.3%下回っているも。また、本年度から加えられた「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」という質問に対し、小学校では「そう思う。どちらかといえば、そう思う」と回答した割合は78.9%で、全国平均を6.6%下回っている。

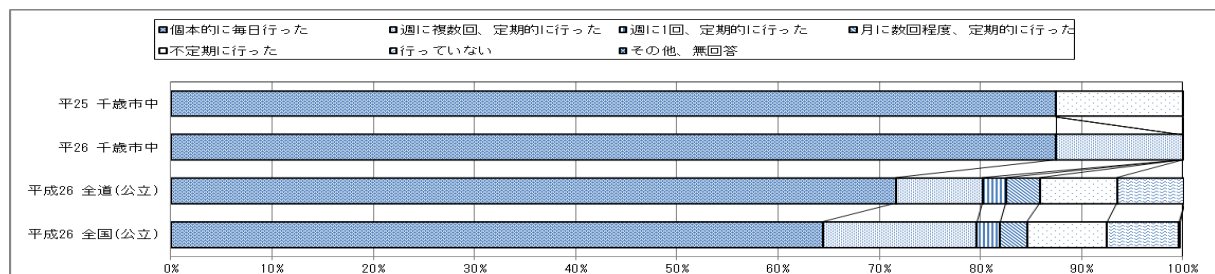
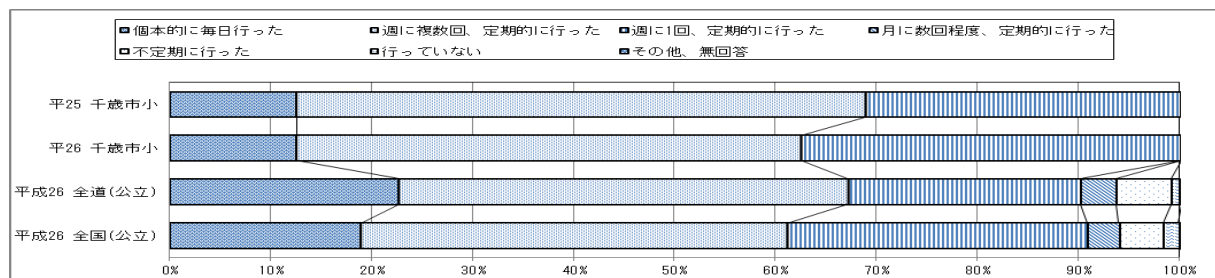
学級での話し合いや班活動、行事への取組等々を通して仲間を大切し、安心感や所属感の持てる学級づくりを心掛ける必要がある。

5. 学校質問紙の結果

読書

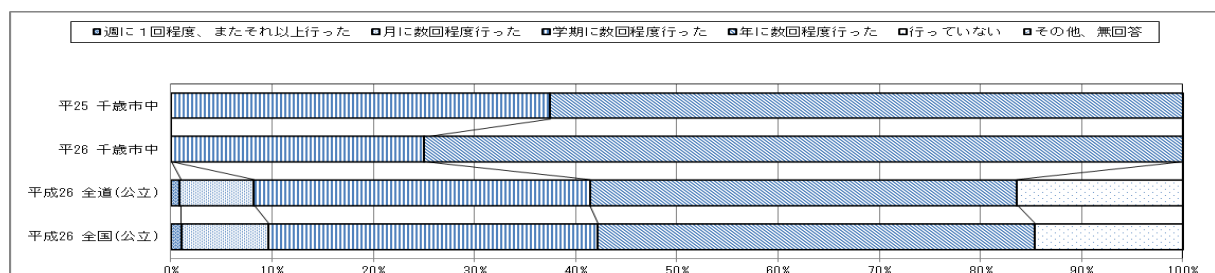
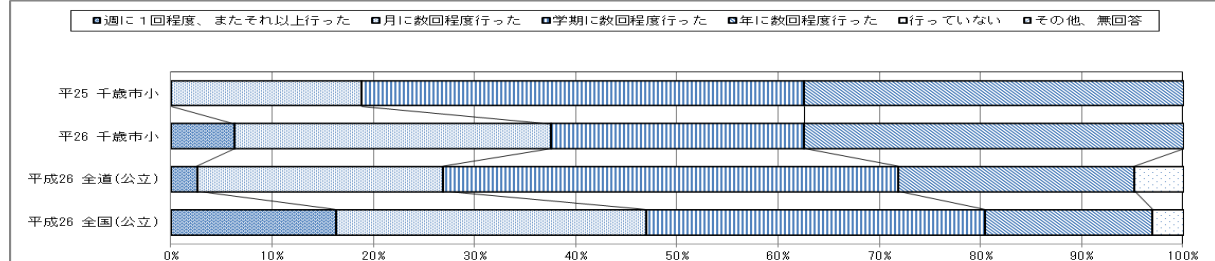
「朝読書を毎日、或いは週に複数回、定期的実施」について、中学校は全ての学校で達成されたが、小学校においては更に充実が必要。また、学校図書館の活用も課題である。

質問番号	質問事項
23	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、「朝の読書」などの一斉指導の時間を設けましたか



「朝の読書」などの一斉読書の時間の設定について、「毎日」或いは「週に複数回」実施している学校は昨年度（小 68.8%、中 87.5%）であったが、今年度は（小 62.5%、中 100%）となり、中学校において全ての学校で積極的な取組が行われるようになった。小学校では昨年度と比較し若干低下しているが、「週に一回」を含めると 100% となり、「朝の読書」は定着してきている。各学校では漢字や計算練習などの「朝学習」も取り入れ学力向上に力を入れていることから、「朝読書」の回数を増やしづらい状況となっているが、「学校教育基本計画」において「一斉読書の時間を週に複数回以上設ける」ことを目標としており、特に小学校においては工夫を加え一層の充実を図っていく必要がある。

質問番号	質問事項
24	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、学校図書館を活用した授業を計画的に行いましたか

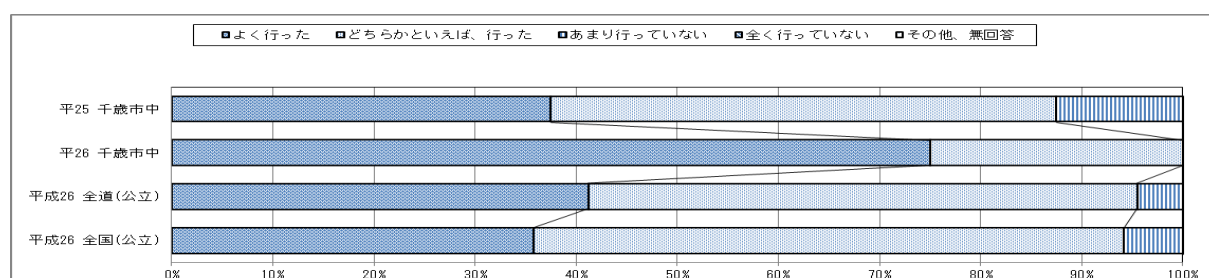
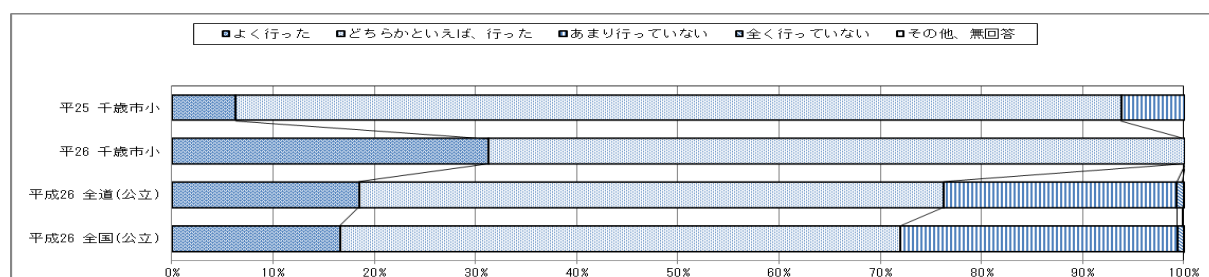


一方、学校図書館の利用について、「学校図書館を活用した授業を計画的に行ったか」という質問について、「週に一度から月に数回」と回答した割合は、全国で（小47.0%、中9.6%）であることに對し、千歳市は（小37.6%、中0%）となっており、学校図書館の利用は十分とはいえない。しかし小学校において昨年度18.8%であったことと比較し、取組は進んできている。国語科の指導において、教科書題材の著者の他の作品やテーマに関連する作品などを読むことを計画することが多いが、市立図書館（学校図書館司書）との連携により、子どもが手に取って読めるだけの図書を用意したり、教育課程に位置付けられた教材等に関する蔵書を整備したりするなどの取組が必要である。学習指導要領において「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する」が示されていることに留意することが必要である。

キャリア教育

小中学校ともに極めて積極的な取組が行われている。

質問番号	質問事項
33	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか

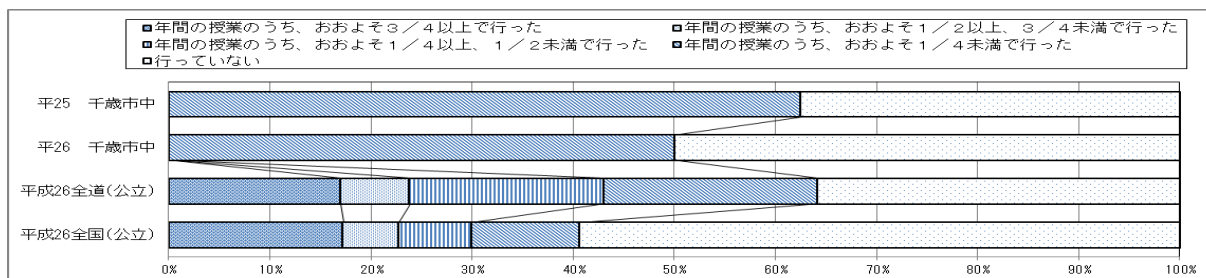
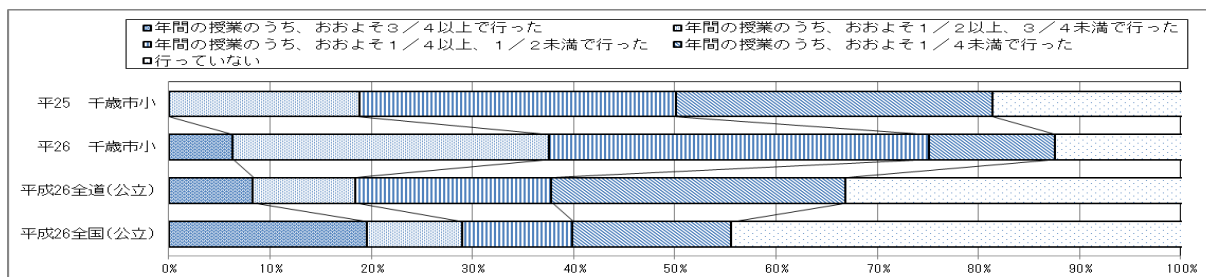


「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしたか」という質問について、「よく行った」或いは「どちらかといえば行った」と回答した学校は、昨年度（小93.8%、中87.5%）から今年度（小100%、中100%）となり、全国（小72.0%、中94.2%）との比較においても極めて積極的に取り組まれている。「学校教育基本計画」において「千歳市の歴史や文化、人々の工夫や努力にふれさせながら、成長への希望や意志を生み出す取組」を施策としてあげ、「千歳市の特色を生かした教育課程の編成」、「地域の人材の積極的な活用」、「千歳市アクティブスクール事業」などを推進することとしている。社会への視野を拓け、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることは重要な課題であり、今後も継続して取組を進めることが必要である。

習熟度別少人数指導

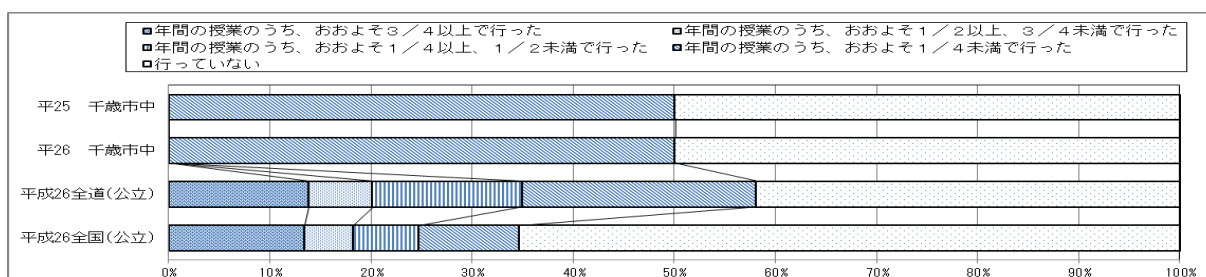
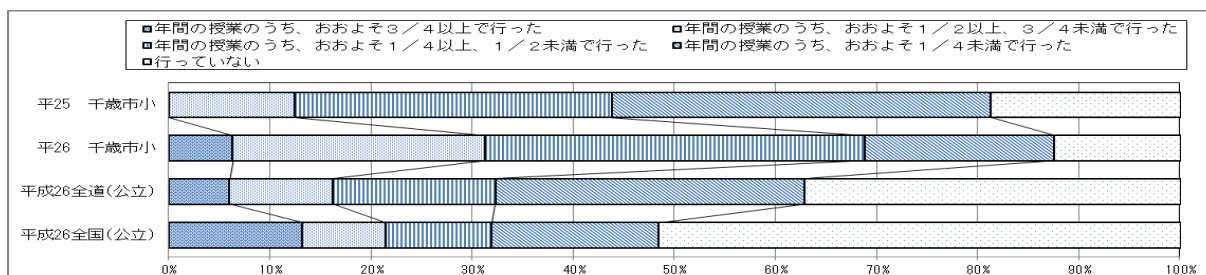
習熟度別少人数指導は「習熟の遅いグループ」に対しても「習熟の早いグループ」に対しても全国を上回る取組がみられる。中学校においては実施の割合を高めることが課題。

質問番号	質問事項
53	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数(数学)の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしましたか



「習熟の遅いグループに対し、少人数による指導を行い、習得できるようにしたか」という質問について、「実施した」と答えた学校が（小 87.5%、中 50.0%）となり、全国（小 55.8%、中 40.6%）と比較し、高い割合で実施されている。また、昨年度は（小 81.2%、中 62.5%）であるが、小学校においては、千歳市の施策として「学習支援員」の配置を計画することなどにより取組が促進された。また、大半の授業（年間授業の二分の一以上）で計画している割合が（小 37.6%、中 0%）と全国の（小 29.0%、中 22.7%）との比較においても、小学校において積極的に取り組まれている。今後、中学校においても取組を工夫し、具体化する必要がある。

質問番号	質問事項
54	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか



「習熟の早いグループに対して少人数指導を行い、発展的な内容を扱ったか」という質問について「実施した」と回答した学校は（小 87.5%、中 50%）となり、全国（小 48.4%、中 34.6%）と比較し、取組が進んでいる。今後も習熟の早いグループ、習熟の遅いグループはいずれも固有の課題をかかえており、今後も積極的な対応を図ることが求められる。

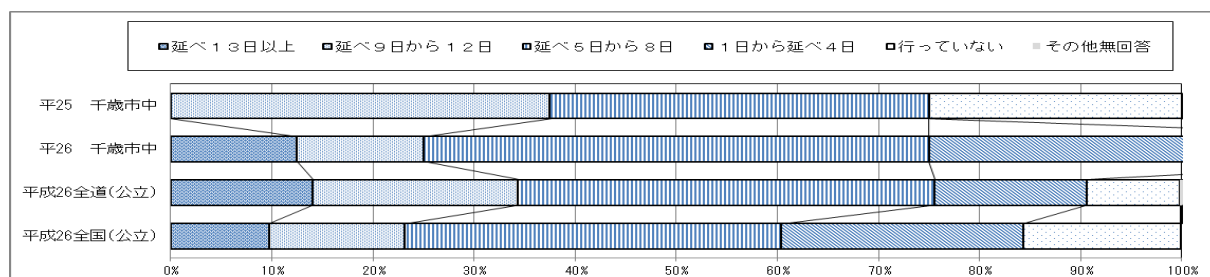
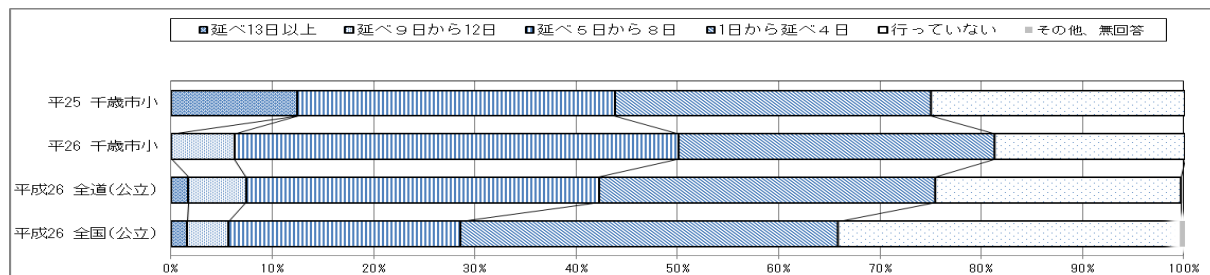
「学校教育基本計画」において「個に応じたきめ細かな学習指導」を掲げ、「算数・数学の授業において、

習熟の遅いグループに少人数指導を行い、習得できるように実施している学校の割合」を100%とする目標を設定している。今後、「指導方法の工夫改善による加配」や「学習支援員」の配置などを活用し、一層の充実を図っていくことが必要である。

長期休業中の学習サポート

中学校においては全ての学校で実施。小学校の小規模校においては、通学上の課題などを解決し、実施に向けて検討を進めていきたい。

質問番号	質問事項
27	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、長期休業日を利用した補的な学習サポートを実施しましたか（実施した日数の累計）

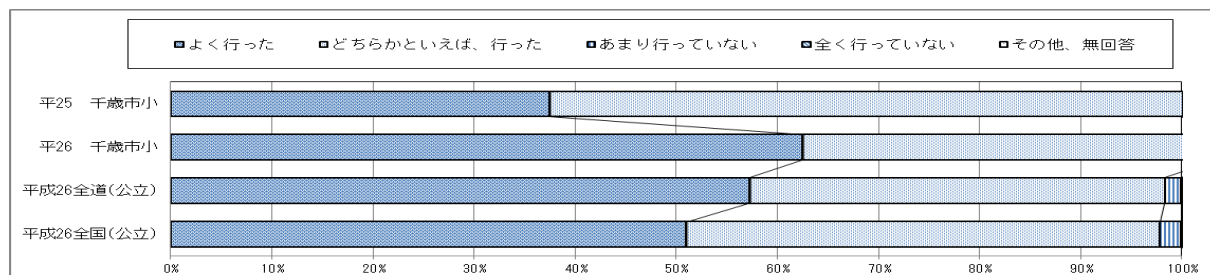


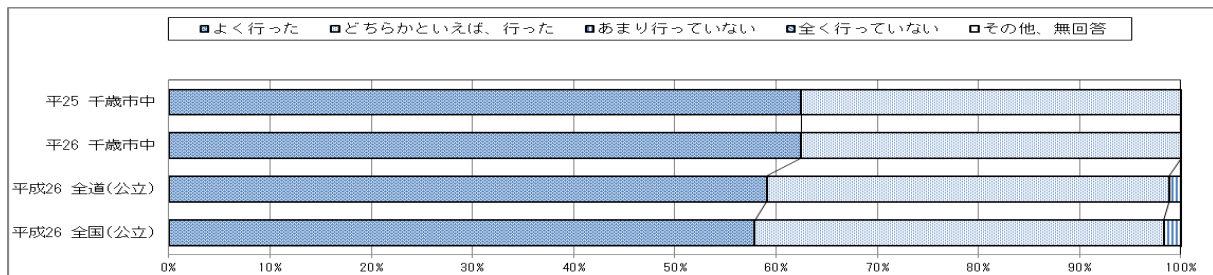
長期休業中の学習サポートを実施している学校は、昨年度（小75.0%、中75.0%）であったが、今年度は（小81.2%、中100%）となり、特に中学校においては、全ての学校において取組が進められるなど年々充実してきている。実施していない小学校は小規模校が多く、課業日における個別の指導が比較的容易なことから、補的な学習の必要性は低いと思われるが、今後、発展的な学習など学力の一層の向上を目指す取組を進めていくことが必要である。長期休業中の補的な学習については、科学技術大学の支援を受けてサポート体制を整えているが、今後も体制の充実を図り、「学校教育基本計画」で掲げている「長期休業日を利用した学習サポートを実施している割合」を100%とする目標の達成をめざし、学校の実態に応じた取組を進めていく必要がある。

漢字・語句の指導

積極的な指導が行われており、今後、言語活動と結びつけた取組が求められる。

質問番号	質問事項
64	調査対象学年の児童（生徒）に対する国語の指導として、前年度までに、漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業をおこないましたか。



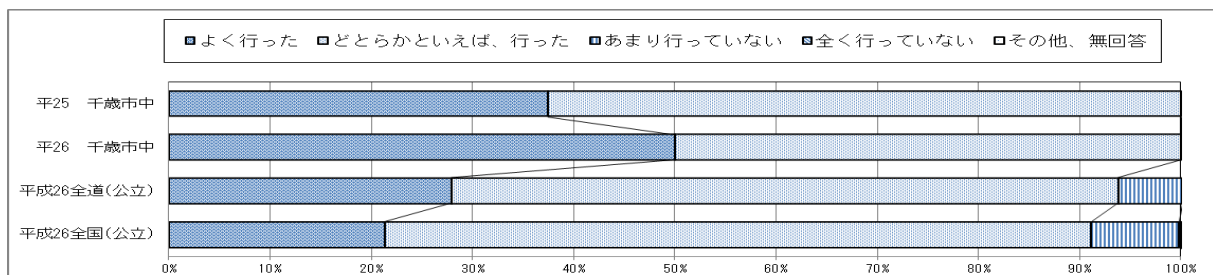
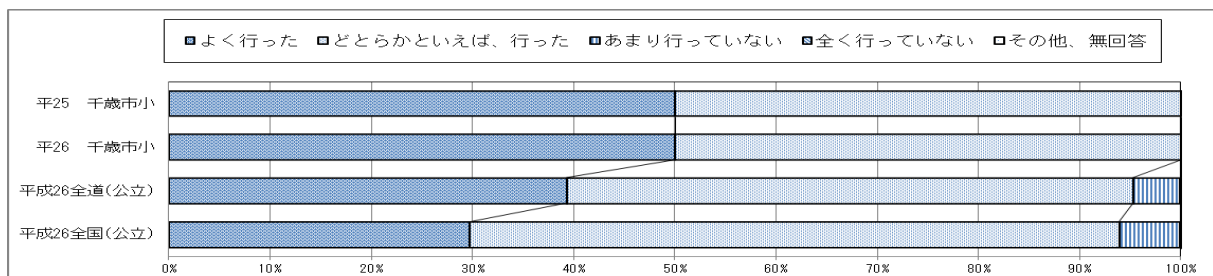


「よく行った」と回答した学校は（小 62.5%、中 62.5%）であるが、全国（小 51.0%、中 57.9%）と比較し、小中学校とも若干高く、積極的な取組が行われた。また昨年度は（小 37.5%、中 62.5%）と小学校において低く、語句や漢字への指導に対する積極性が薄れてきていることが心配されたが、今年度改善が図られている。これらの指導の着実な積み重ねにより、「国語A」問題における成績の向上へとつながったと考えられる。今後も、学習における言語活動の重要性が示されていることから、小中一貫して、指導を粘り強く進めることが必要である。

授業に対する教師と児童生徒との意識の違い（*児童・生徒質問紙の回答との比較）

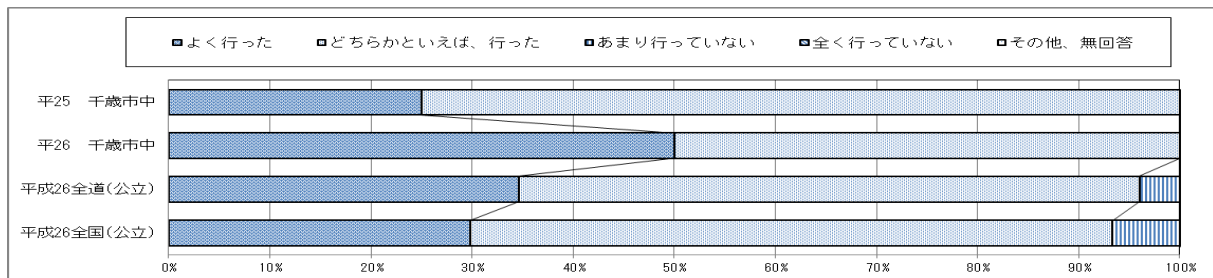
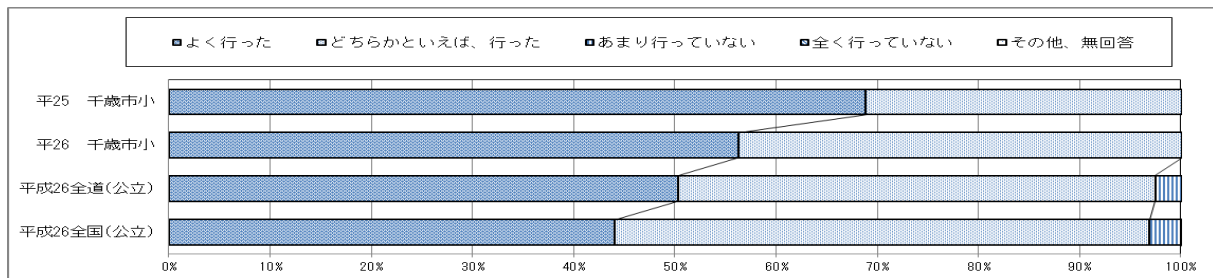
授業に対する児童生徒と教師の意識は依然隔たりがある。児童生徒による授業評価の導入などにより改善を図る必要がある。

質問番号	質問事項
31	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか



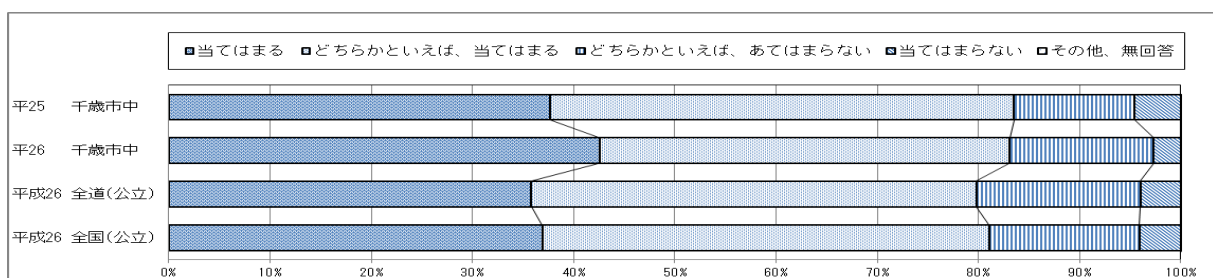
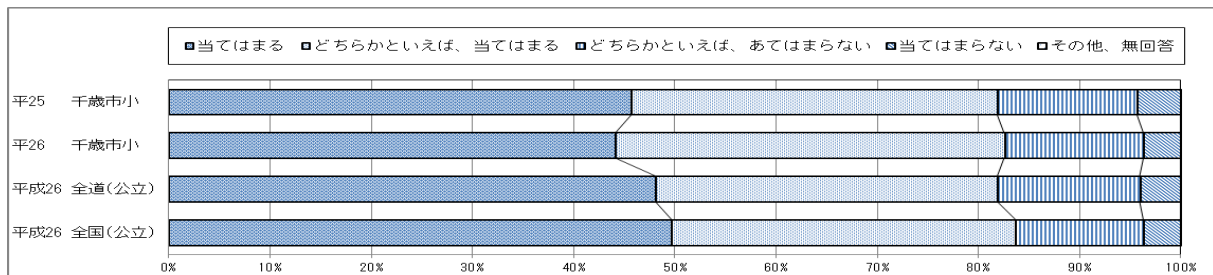
学校質問紙では「児童生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしているか」という質問に対して、小学校・中学校ともに全ての学校が「よく行った。どちらかといえば、行った」と回答している。

質問番号	質問事項
32	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか。



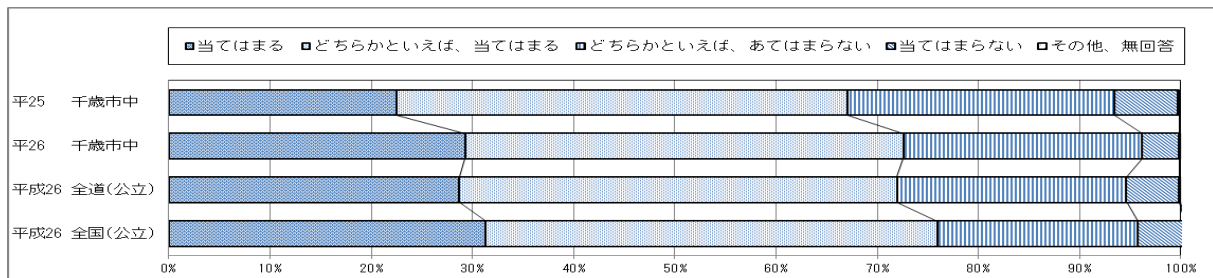
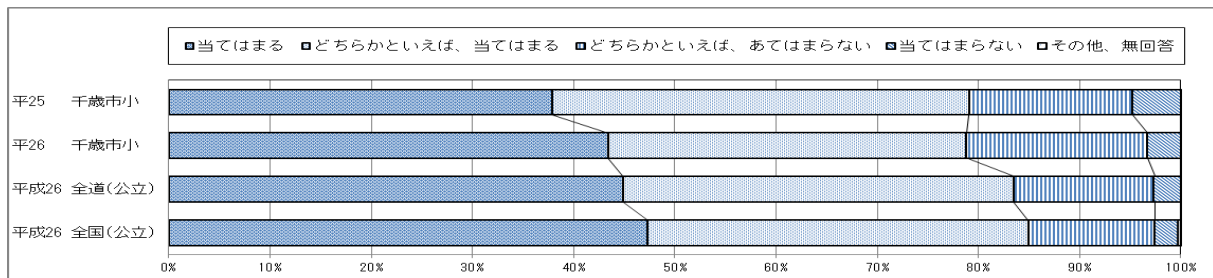
また、「児童・生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めたか」という質問に対して小学校・中学校ともに全ての学校が「よく行った。どちらかといえば、行った」と回答している。

質問番号	質問事項（＊児童・生徒質問紙）
4 2	5年生までに（中学校1，2年生のとき）受けた授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか



一方、児童生徒質問紙においては、「普段の授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていると思うか」という質問に対し、「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した小学生は 82.6%（昨年度 81.9%）、中学生では 83.1%（昨年度 83.5%）となっている。

質問番号	質問事項（＊児童・生徒質問紙）
4 3	5年生までに（中学校1，2年生のとき）受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか



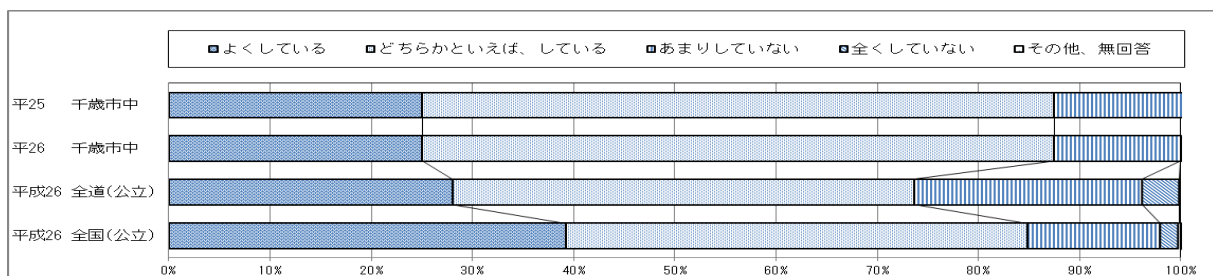
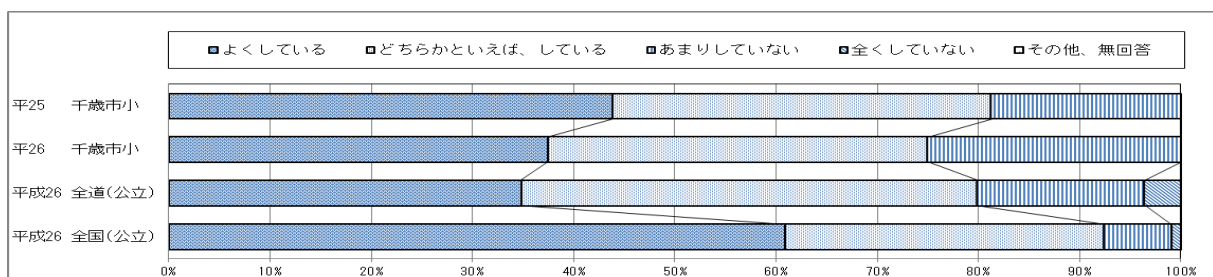
また、「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動をよく行っていると思うか」という質問に対し、「当てはまる。どちらかといえば、当てはまる」と回答した小学生が78.8%（昨年度79.1%）中学生は72.6%（昨年度67.1%）となっている。

これらのことから、指導する教師と指導を受ける児童生徒との間には、相当の意識の違いがあることが分かる。この傾向は昨年度から変わりなく改善が求められる。このずれを少なくするためには、児童生徒による授業評価を用いて分析を行うなど、子どもの視点に立った授業改善を進める必要がある。「学校教育基本計画」において、児童生徒による授業評価を取り入れている学校の割合（現状は小学校23.5%、中学校33.3%）を100%とする目標を掲げているが、積極的な取組が必要である。

講師等を招聘した研修の実施

昨年度と比較し改善されているとはいえない。市内外の学校や近隣校との連携によって改善を図る必要がある。

質問番号	質問事項
小88・中86	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか



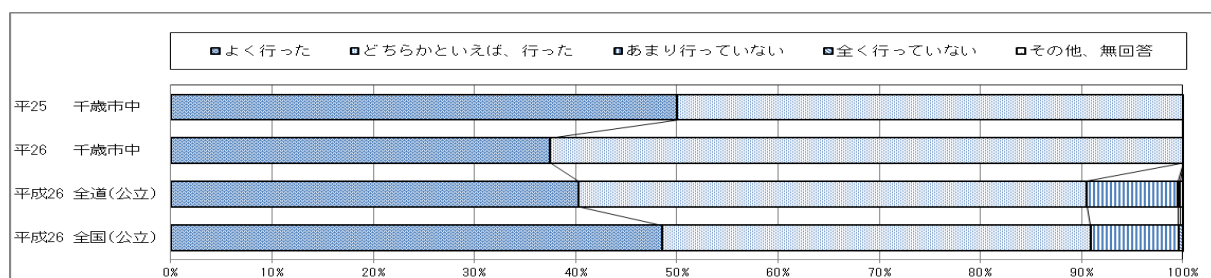
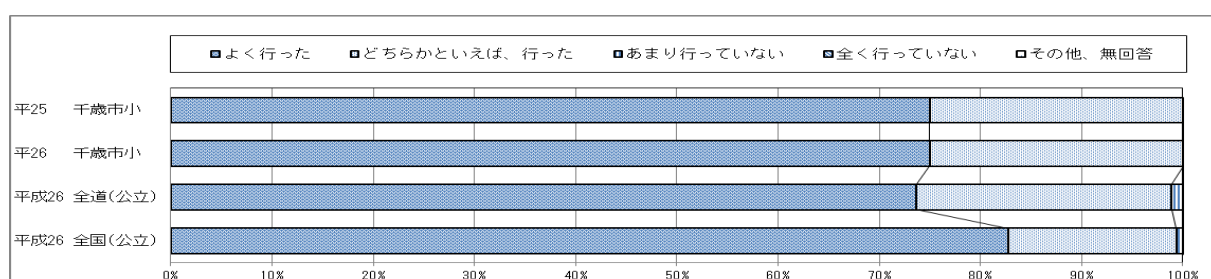
「よくしている」と回答した学校は（小37.5%、中25.0%）「どちらかといえば、している」と回答した学校は（小37.5%、中62.5%）であり、これは昨年度（よくしている～小43.8%、中25.0% どちらか

例えば、している～小 37.5%、中 62.5%）と比較し、改善されてきているとはいえない。全国においては「よくしている」と回答した学校が（小 60.9%、中 39.2%）となっており、これらの比較においても、実施している割合が低いといえる。「学校教育基本計画」において、学校でテーマを決め、講師を招聘するなど校内研修を行った学校の割合を 100%とする目標を掲げている。今後、「学校力向上に関する総合実践事業」において行われている近隣の学校と連携した研修のあり方などを参考に、積極的な工夫を進める必要がある。

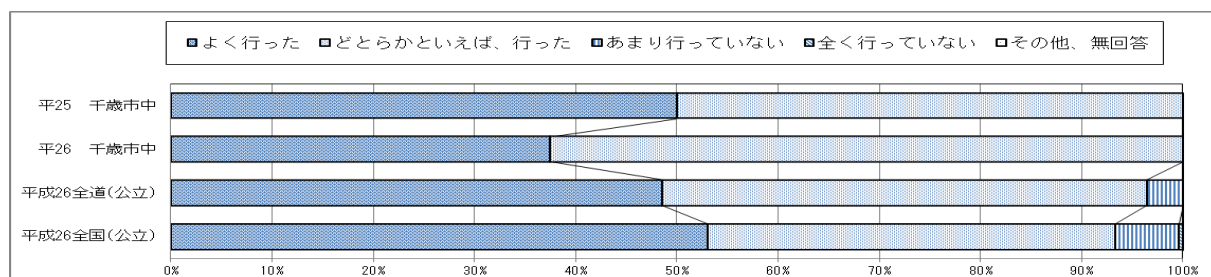
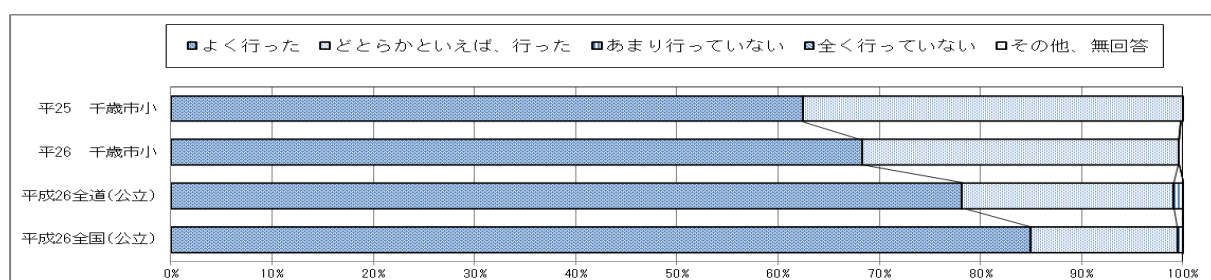
家庭学習（宿題）

保護者への働きかけ、児童生徒への学習方法の指導、教職員での共通理解については、全国を取組を大きく上回るなど積極的な取組がみられる。宿題を出すことにやや消極的な傾向があるが、検討を進めていく必要がある。

質問番号	質問事項
小 80 中 78	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか

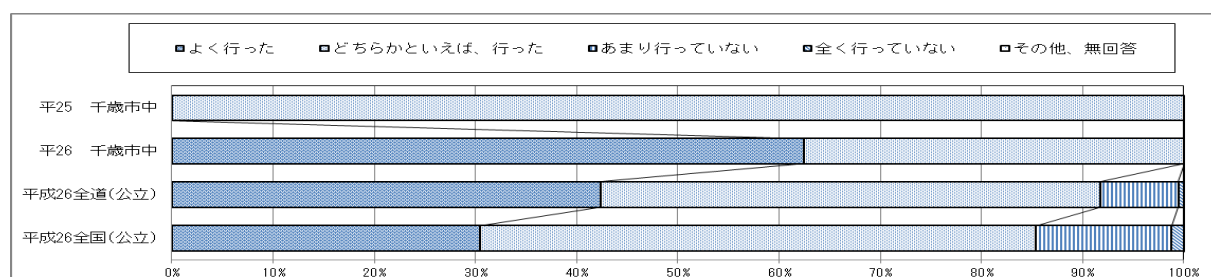
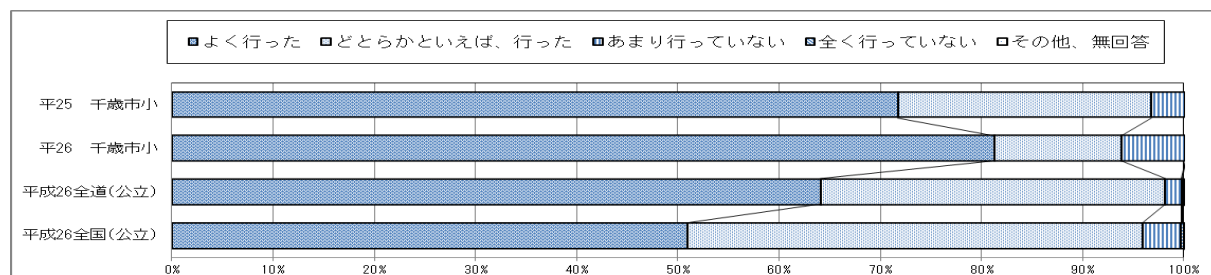


質問番号	質問事項
小 82 中 80	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、算数（数学）の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか



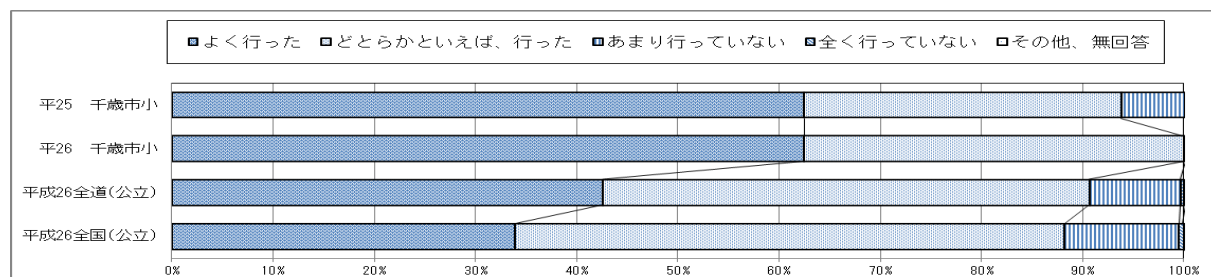
「家庭学習の課題(宿題)を与えたか」という質問に対し、「よく行った」と回答した学校は国語・算数(数学)の平均で(小 71.9%、中 37.5%)であり、昨年度(小 68.8%、中 50.0%)と比較すると、小学校においてはやや増加の傾向がみられるが、中学校においては低下している。これは全国の(小 83.8%、中 50.8%)との比較においてもやや消極的である。今後、宿題を含めた課題の与え方について積極的に検討し、取組を進める必要がある。また、保護者への働きかけについては、以下の通り、小、中学校ともに大きな改善が図られている。

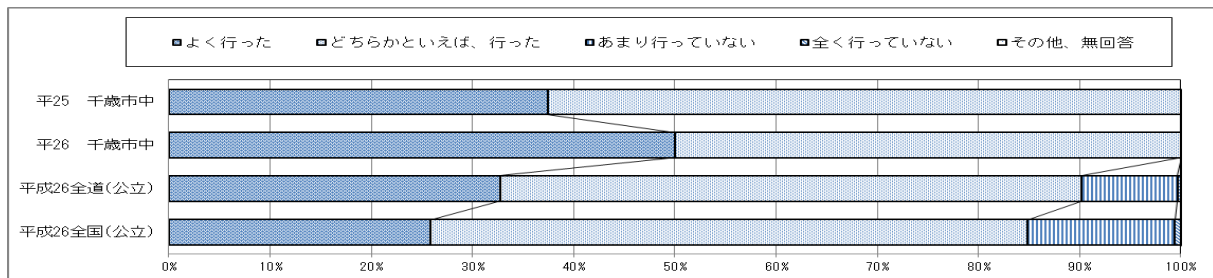
質問番号	質問事項
小 84 中 82	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、保護者に対して児童(生徒)の家庭学習を促すよう働きかけを行いましたか(国語/算数・数学共通)



「保護者に対して児童の家庭学習を促すような働きかけを行ったか」という質問について、「よく行った」と回答した小学校は81.3%(昨年度71.8%)と昨年度や全国(51.0%)との比較においても積極的な取組が進められている。また、中学校においても、「よく行った」と回答した学校が62.5%となり、昨年度皆無であったことや全国30.4%との比較においても、かなり積極的な取組が進められてきている。これは小中の連携のもと、「家庭学習の手引き」を作成するなど、共通の取組が具体化してきていることによる。また、児童生徒への指導についても、以下の通り積極的行われている。

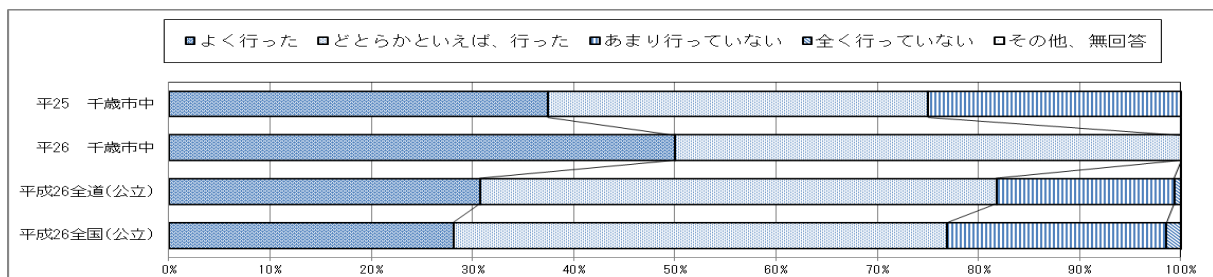
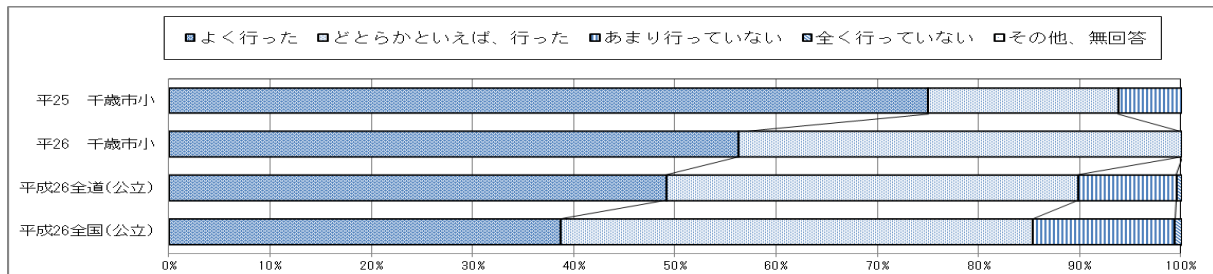
質問番号	質問事項
小 87 中 85	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、児童(生徒)に学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしましたか(国語/算数・数学共通)





「児童・生徒に対して家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えたか」という質問について、「よく行った」と回答した学校は小62.5%（全国33.9%）中50.0%（全国25.8%）となっており、小中ともに全国を上回り、かなり積極的に行われている。

質問番号	質問事項
小85 中83	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか（国語／算数・数学共通）

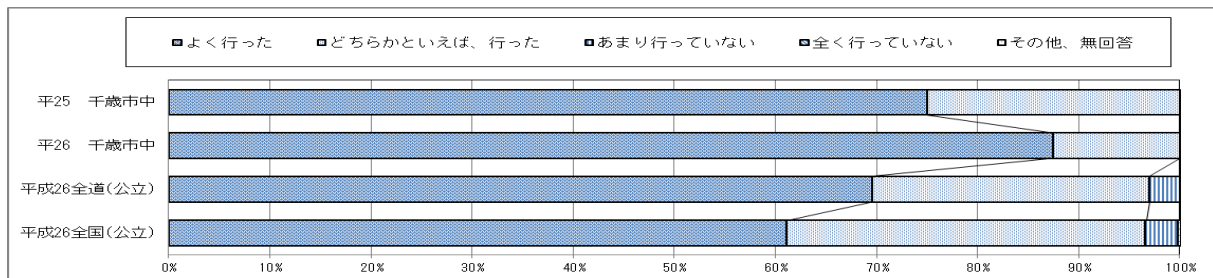
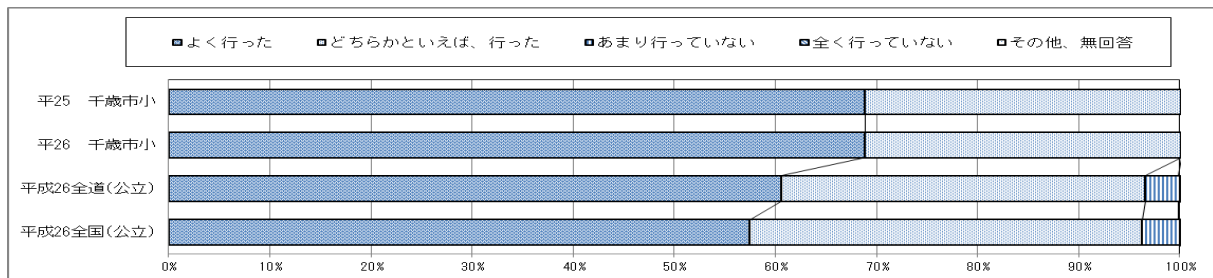


また、「家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図ったか」という質問について、「よく行った」と回答した学校は小56.3%（全国38.7%）中50.0%（全国28.1%）となっており、児童生徒への指導、及び教職員の共通理解等についてはかなり積極的に行われている。とりわけ中学校においては昨年度と比べ大きく取組が進んできている。現在、家庭学習について小中学校の連携を図る取組が進められているが、今後も一層充実を図りながら一貫した指導を徹底し、定着させていく必要がある。

学習規律

各学校とも工夫した取組が進められているが、小学校においては一層徹底することが重要である。中学校では、前年を上回る積極的な指導が行われている。

質問番号	質問事項
35	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底しましたか。

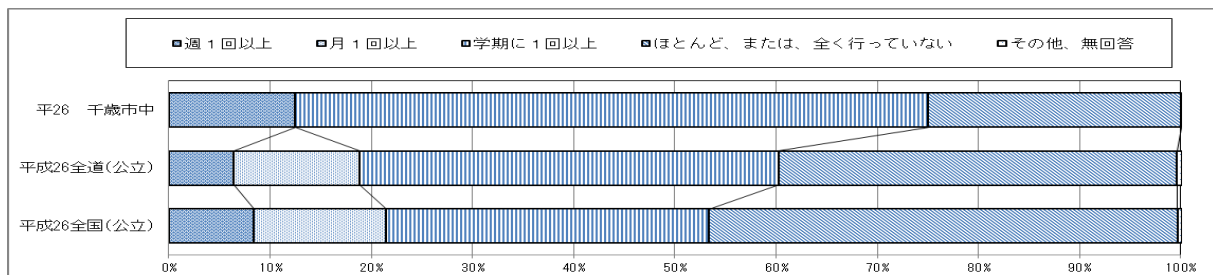
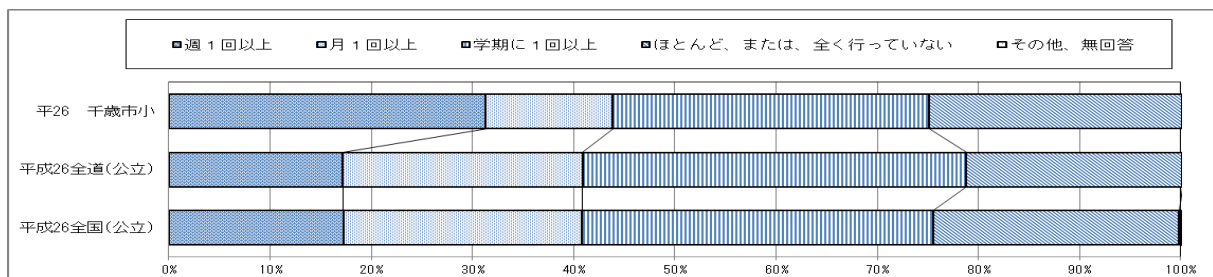


小中学校ともに、全国を上回る積極的な指導が行われている。とりわけ、中学校では、「よく行った」と答えた学校が87.5%と、前年の75.0%をこえる割合で徹底した取組がなされている。これに比し、小学校は68.8%とやや低く、前年度から横ばいで推移している。小学校においては、低学年から確実に身に付けさせなければならないことであり、一層の指導の必要性を認識することが求められる。「学校教育基本計画」においても、「学習規律の維持を徹底している学校の割合」を100%とする目標を掲げており、児童生徒に学習のきまりのよさを理解させ、効率的・効果的な学習を促進することが必要である。

ICT機器の活用

現在、全国に比べ大きく取組が進みつつある。電子黒板の各校配置を計画的に進めているが、今後、活用の促進を確実に進めていく必要がある。

質問番号	質問事項
46	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度に、算数（数学）の授業において、コンピュータ等の情報通信技術（パソコン、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行ないましたか



（平成25年度の調査ではなかった質問項目であるので、昨年度との比較はできない）

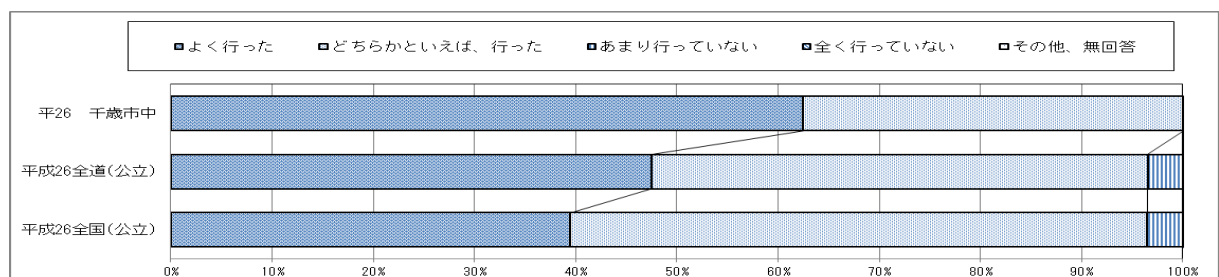
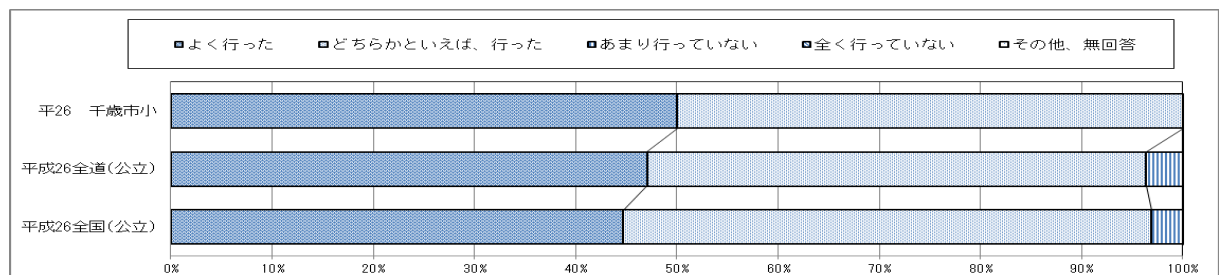
「週に1回以上」と答えた、日常的な活用を行っている学校は、小中学校とも全国を上回っている。「月

1 回以上」等と答えた学校が多いが、この調査の対象は昨年度の状態であり、現在、電子黒板が配置された学校においては、日常的に授業での活用が進んでいる。「学校教育基本計画」において、「電子黒板及び実物投影機を配置している普通教室の割合」を 100%とする目標を掲げ、次年度までに配置を完了する予定であるが、活用の促進を確実に進めていく必要がある。

児童生徒のよさの評価

全国と比較し劣ってはいないが、児童質問紙による自己有用感の低さをふまえ、積極的な取組が必要である。

質問番号	質問事項
3 4	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校生活の中で、児童（生徒）一人一人のよい点や可能性を見付け、児童に伝えるなど積極的に評価しましたか。



（平成25年度の調査ではなかった質問項目であるので、昨年度との比較はできない）

全国と比較し、特に中学校において積極的な取組が行われている。しかし、児童生徒質問紙において、千歳市の子どもたちの自尊感情の低さが明らかになっていることから、取組を一層充実させていく必要がある。「学校教育基本計画」において、「子どもの活動が見える場の創出：各学校の特色を生かし、動植物の世話や飼育など、子ども一人一人の自主的な活動が活発に展開される場を創り出したり、各種観察記録などを掲示し、努力の成果を認めるなど、子どもたちの活動を促進します」や「子どもの努力を認め褒める活動の推進：学習の成果や子どもの活動の様子等の学年学級通信への掲載や校内での掲示などを通じて、努力の大切さを認め合う雰囲気醸成を図ります」と具体的な内容を示している。各学校では、それぞれの発達段階に応じた児童（生徒）の積極的な評価を確実に積み重ねていく必要がある。